

II. 遺跡調査の概要

ふなばしみやうら

船橋宮裏遺跡 (本発掘調査B)

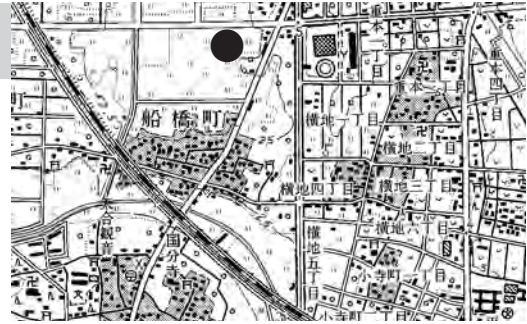
所在地 稲沢市船橋宮裏町地内
(北緯35度14分54秒 東経136度46分37秒)

調査理由 道路改良事業 ((一) 津島稲沢線)

調査期間 令和5年1月～3月

調査面積 560㎡

担当者 堀木真美子・武部真木



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は、道路改良工事 ((一) 津島稲沢線) に伴うものであり、愛知県建設局道路建設課 (一宮建設事務所) から愛知県民文化局を通じた委託事業として行った。令和5年1月～3月の期間に面積560㎡の発掘調査を行った。

立地と環境 遺跡は稲沢市の中心部を流れる三宅川の右岸自然堤防上に立地する。南へ約1kmの距離には尾張国分寺跡、同じく西には尾張国分尼寺推定地である馬場・法花寺遺跡をはじめ古代の遺跡も多数が分布する。

平成3年に発掘調査が行われた遺跡の北部では、火葬施設および方形や円形土壇からなる墓域が確認され、15世紀頃の集落縁辺部の景観がうかがわれた。このときの調査では、遺跡の立地する微高地範囲は南北に細長く、三宅川右岸域に分布する中世遺跡のうちでは西端にあたと指摘されている。

調査の概要 今回の調査地点は旧調査地点から南西に50mほど離れた場所にあり、現況是水田耕作地となっている。調査区内を南北に通る現況大畦の東側・西側とでは堆積状況の違いが認められ、また西側と南側への地形の傾斜が確認できる。明確な遺構は少なく遺物も希薄という状況から、遺跡範囲の南西端と考えられる。

まとめ 検出レベルや堆積状況は、旧調査地点の西部 (水田地区) での様相とほぼ同様である。居住域としての土地利用には適さず、また広く削平を受けているとみられる。 (武部真木)



遺跡遠景 (西から)

きよすじょうかまち

清洲城下町遺跡 (本発掘調査B)

所在地 清須市一場地内

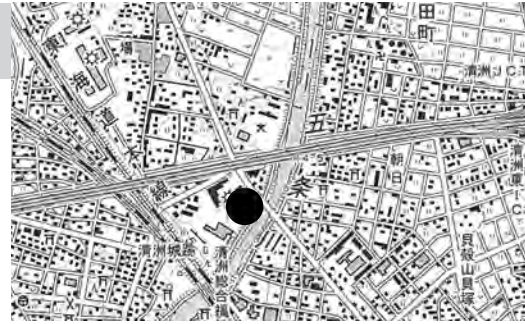
(北緯35度13分8秒 東経136度50分38秒)

調査理由 橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事
(主) 名古屋祖父江線(清洲橋)

調査期間 令和4年12月～令和5年3月

調査面積 1,195㎡

担当者 樋上 昇・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 本遺跡の調査は、橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事(主)名古屋祖父江線(清洲橋)にともなう事前調査として、愛知県建設局道路整備課(尾張建設事務所)より愛知県県民文化局を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、令和4年12月から令和5年3月にかけて調査を実施した。調査区は清洲橋の南西、五条川右岸にある。調査面積は1,195㎡で、北側から22A区～22C区に分けて調査した。

立地と環境 清洲城下町遺跡は清須市中央部を流れる五条川兩岸の自然堤防状微高地とその後背湿地に広がる遺跡で、今回の発掘調査地点は清須城天守台跡の北にある内堀と中堀の中にあたる。

調査の概要 今回の調査では、戦国時代から江戸時代にかけての遺構と出土遺物が確認できた。

戦国時代～江戸時代前期初頭では、五条川右岸堤1基と溝12条、土坑12基を確認することができた。五条川右岸堤(054SX)の南西隅部には、河原石の円礫・亜円礫で集積した護岸施設(036SX)があり、河川側裾部に板石状の石材が張り付くように数個みられた。また036SXの裾部には巨礫が遺存する土坑が2基(004SK・053SK)あり、五条川の舟運に関わる施設の可能性がある。また五条川右岸堤上で確認された柱穴状土坑5基(044SK～047SK・051SK)も櫓台や幡立て台などの施設の可能性がある。

江戸時代では、五条川右岸堤から河川に至る河川敷(003SX)を確認することができた。

(蔭山誠一)



22B 区全景 (南東上空より)



22B 区 044SK ～ 047SK ・ 051SK SK007 (南西より)

めいじょうこうえん

名城公園遺跡(本発掘調査B)

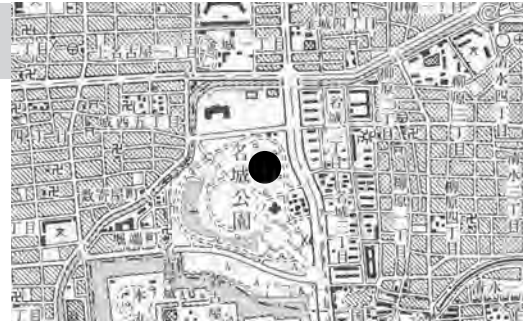
所在地 名古屋市区名城1丁目
(北緯35度11分24秒 東経136度54分09秒)

調査理由 愛知県新体育館整備・運営等事業

調査期間 令和4年4月～6月

調査面積 27,000㎡

担当者 鈴木正貴・永井邦仁・早野浩二・鈴木恵介・
木村有作・石黒立人・宮腰健司



調査地点(1/2.5万「名古屋北部」)

調査の経過 調査は、愛知県スポーツ局による愛知県新体育館整備・運営等事業に伴う事前調査として、愛知県民文化局から委託を受けて行った。当該遺跡では令和3年度(令和4年1月～3月)にも発掘調査を行っており、引き続き令和4年4月～6月に令和4年度の発掘調査を行った。両年度の発掘調査総面積は27,000㎡である。

調査区は表土掘削の進行状況に合わせて設定され、令和4年度の調査区(22A～C区)は主に発掘調査対象地の北東部に相当する。しかし、前年度に着手した調査区(21Aa～Cb区)の一部は年度内に表土掘削が完了しなかったため、年度を越えて発掘調査を継続した。

立地と環境 遺跡は特別史跡名古屋城の北側に位置し、名古屋城本丸などの所在する台地から約10m下った沖積低地にあり、標高は4.5～5.5mである。江戸時代には、名古屋城北堀に隣接する「御蓮池」とその北側に尾張徳川家の庭園である下御深井御庭が広がっていた。これらの土地は明治22(1889)年からは陸軍の練兵場となっていた。

調査の概要 遺跡の中央には南東から北西方向に抜ける旧河道が確認された。旧河道の形状は概ね古墳時代の状況であり、最大幅は約45mの谷地形となっている。その埋土は粗粒砂～円礫を主体としており、出土する須恵器の年代から奈良時代初頭までに河川堆積によって埋没したと考えられる。そして旧河道左岸(西側)には自然堤防とみられる微高地があり、ここを中心に古墳時代後期を中心とする集落が展開する。これに対して右岸(東側)では当該期の竪穴建物や掘立柱建物は少ないものの大型のものが所在し、左岸とは異なる土地利用状況がうかがえる。(永井邦仁)

21Aa・21Ca区 北東方向に傾斜する自然堤防状微高地の縁辺に相当する旧河道左岸の北部において、古墳時代前期後半、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代、中世以降の各時期の遺構を検出した。

古墳時代前期後半の遺構として、平行する2条以上の溝00654SD・00688SD、00697SDを検出した。00688SDにおいてはS字甕、高杯を主体とする土器群、編物錘と思われる長細い自然石約15点の集積も確認された。

古墳時代後期の遺構として、竪穴建物、土坑等がある。竪穴建物は炭化材、炭化物層の広がりが見られるものの、掘方を明確に検出することは困難であった。炭化材が比較的良好に遺存する02135SIでは、炭化材に混じって須恵器有蓋高杯が伏せられた状態で出土した。竪穴建物の竈と思われる遺構として、焼土と炭化物に混じって須恵器杯が3個体逆位で重ねられた01513SX、須恵器蓋が石製支脚に被せられていた01250SL、竈内に台付甕が残されていた(02160SIに伴う)02149SL等がある。土坑00693SKからは、須恵器蓋杯・高杯・甕・鉢・筒形器台、土師器宇田型甕等が良好な状態で出土した。炭化物が互層状に堆積する浅い掘鉢状の落ち込み0095SXからは、須恵器鉢、土師器台付甕、砥石等が出土した。

飛鳥・
奈良時代

その他、まとまった遺物が出土した落ち込み状の遺構01519SX等の遺構がある。

飛鳥・奈良時代の遺構としては、竪穴建物、掘立柱建物等がある。竪穴建物は床面付近とその下位の掘方が検出された。01540SIは一辺約6mで、支柱穴が2棟分確認されること、竪穴建物の平面形がやや不整形であることから、別の1棟が重複していた可能性が高い。北辺に敷設された竈には、支脚を抜き取ったと思われる小穴に甕の口縁部から体部上半が伏せられた状態で残されていた。掘方からは須恵器有台杯が出土した。小型の竪穴建物01545SIは長軸約4.0m、短軸約3.5mで、東辺に竈を敷設する。竈側の床面一帯には炭化物層と灰層の薄層が互層状に累積した状態で検出され、その上面からは円面硯が出土した。

竪穴建物と掘立柱建物等から構成される集落の廃絶後には、自然堤防状微高地の西縁に沿って、ほぼ平行する2条の溝00150SD、00151SDが掘削される。また微高地上には平行する小溝群が掘削される。確実に遺構に伴う遺物がほとんどなく、詳細な時期は不明であるが、遺構の先後関係、埋土からは中世以前と推定される。(早野浩二)

21Ba区

微高地の南半部は、北部から連続する古墳時代の集落域となっている。集落の建物は大半が竪穴建物で、その平面規模は一辺約4mが大半であるが、一部に一辺約6m以上のものがみられる(01216SI・02199SIなど)。特に02199SIでは屋根材または壁材の一部と考えられる炭化材が広範囲で確認されており、焼失建物と位置づけられる。出土遺物は7世紀代の須恵器が多数ある。02199SIは旧河道(00035NR)左岸にきわめて接近しているが、00035NR左岸においてもラミナ状堆積の中から7世紀代の須恵器が多量に出土しており、河川を間近にした集落景観が想像される。また00035NRの堆積中には、須恵器を含む長径約3m規模の貝層01495SMがある。古墳時代集落の下層には、弥生時代後期初頭の竪穴建物02223SIがあり、建物規模は一辺約6mの隅丸方形である。

下御深井
御庭

21Ba区では、最上位面において江戸時代の溝や池状遺構が検出され、尾張藩の下御深井御庭の一部と考えられる。特に、調査区最南端部で江戸時代後期の瓦や陶器類の出土が集中し、庭園内施設である松山御茶屋付近の可能性が高い。また陶器類に伴って匣鉢や棚板などの窯道具も多く出土しているが、絵図等によれば当該地点から東方には御深井焼の



第1面調査時の遺跡全景(北から)

窯場があったと推定され、それに関連する遺物と位置づけられる。(永井邦仁)

2 1 B b 区 21Bb区西側には旧河道00035NRがあり、遺構が検出された範囲はこの00035NRの右岸にあたる。21Bb区東端部には古墳時代前期より前に形成された微高地が存在し、当初はこの微高地を回り込むように南から北へ00035NRが流れ、古墳時代前期以降に00035NR右岸側の堆積が進んだとみられる。この過程で陸地化した部分には、主に古墳時代後期～古代初め頃の遺構が検出された。また、微高地南端付近に遺物集積00967SUが存在する。

古墳時代後期 00785SD(22Bb区：00757・00758SD、22A区：01160SD・01156SD)は同一の溝であり、微高地と旧河道の間を流れる。溝の長さは名城公園遺跡の中でも最長で(約180m)、21Bb区南東隅から00035NRに沿う形で北上し、22A区、22B区を通り遺跡の北側に抜ける。これと一部並行する溝が21Bb区に端を発する00929SD(22A区：01648SD・01155SD)であり、22A区では等間隔を保って北上する。

00958SD(22A区：01652SD)は21Bb区の微高地から北東方向に流れる溝である。北の22A区に入り、01648SD(22Bb区：00929SD)や竪穴建物01600SIとの重複地点から西の状況は不明である。これらの遺構との切り合い関係から、00958SDは他よりも古く位置付けられ、他の溝と向きが異なることから遺構の用途が異なる可能性がある。

竪穴建物00790SIは長軸(南北)6.3m、短軸(東西、残存長)4.6mを測る。北壁中央東寄りにカマドを1基配置する。西側は旧河道の溢水か自然流路によって削られて遺構の残存状態が不良で、床面がはっきりとしない。

古墳時代前期 00967SUは古墳時代前期の遺物集積である。22Bb区東側に位置する名古屋市調査区付近から連続する。名古屋市による調査でも同様の遺物集積が確認されている。遺物の分布範囲は東西方向に長く拡がり、微高地や旧河道の方向と一致するが遺物の集積状況は流されてはおらず、遺物集積の北側の微高地上から廃棄されたと考えられている。このことから微高地上には何らかの遺構が存在したと推定されるが、主として練兵場時代より後の攪乱によって遺構が検出されない状況であった。(鈴木恵介)

2 2 A 区 旧河道右岸の北部に相当する22A区では、古墳時代の大型竪穴建物2棟(01600SI・



第2～3面調査時の遺跡全景(南から)

01601SI) が検出されている。いずれも平面規模が一辺約7mの正方形であり遺跡内で最大規模となっている。01601SIでは4基の柱穴および北壁中央に竈の遺構が確認されている。また01601SIの北西側には、2間×2間規模の総柱の掘立柱建物01630SBが1棟単独で所在しており、建物方位が共通するので建物群を構成していると考えられる。一方、北東側には若干方位の異なる掘立柱建物01190SBがあり、その柱穴には木製礎板のあったことが確認されている。なお、遺構の重複関係では01600SIから01601SIへ変遷しているが、その南方の22B区にある00790SIとともに旧河道左岸の密集する建物群からは孤立した存在となっている点は、集落構造を理解するうえで興味深い。

2 2 C 区 22A区からさらに北東側の22C区では00035SNに先行する旧河道(01157NR)が確認された。当該河道は00035NRの東側で南から北へ向かって蛇行する右岸の形状となっており、22C区内では弥生時代末期～古墳時代初頭の土器が多量に出土している。出土状況からは旧河道の東側微高地に当該期の集落が存在したことが推測される。(永井邦仁)



00693SK出土状況



01540SIの竈



江戸時代の窯道具類の出土状況



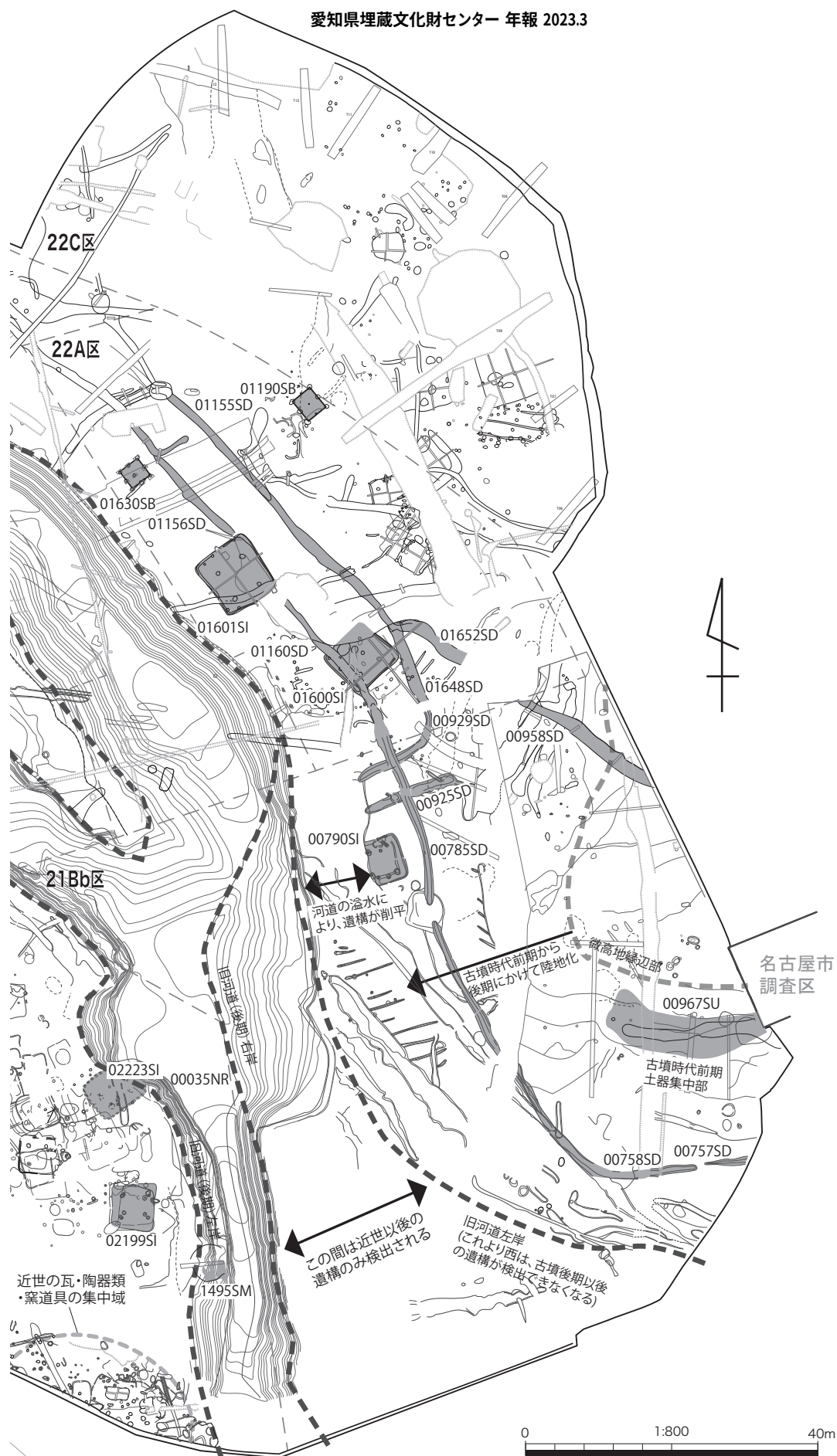
00958SD



00967SU出土状況



第2～4面遺構全体図(西半部)



第2～4面遺構全体図(東半部)

だんぷさん

断夫山古墳 (本発掘調査B)

所在地 名古屋市旗屋二丁目
(北緯35度07分52秒 東経136度54分14秒)

調査理由 史跡 断夫山古墳調査事業

調査期間 令和5年2月～3月

調査面積 100m²

担当者 堀木真美子・早野浩二



調査地点 (1/2.5万「名古屋南部」)

調査の経過 発掘調査は史跡 断夫山古墳調査事業に伴う学術調査で、愛知県民文化局文化芸術課文化財室から委託を受け、一昨年度から継続して実施している。今年度は前方部南西側の一昨年度と対称となる位置に、前方部の墳端、周濠の規模、周堤の有無の確認を目的とした調査区 (22A区)、その外側に、周濠の有無の確認を目的とした調査区 (22B区) を設定した。

立地と環境 史跡 断夫山古墳は岬状に突出する洪積台地 (熱田台地) の南端西縁辺に立地する全長150mの大型の前方後円墳である。築造時期は墳形、過去に採集された埴輪と須恵器から古墳時代後期前半と推定されている。埋葬施設の構造は不明である。

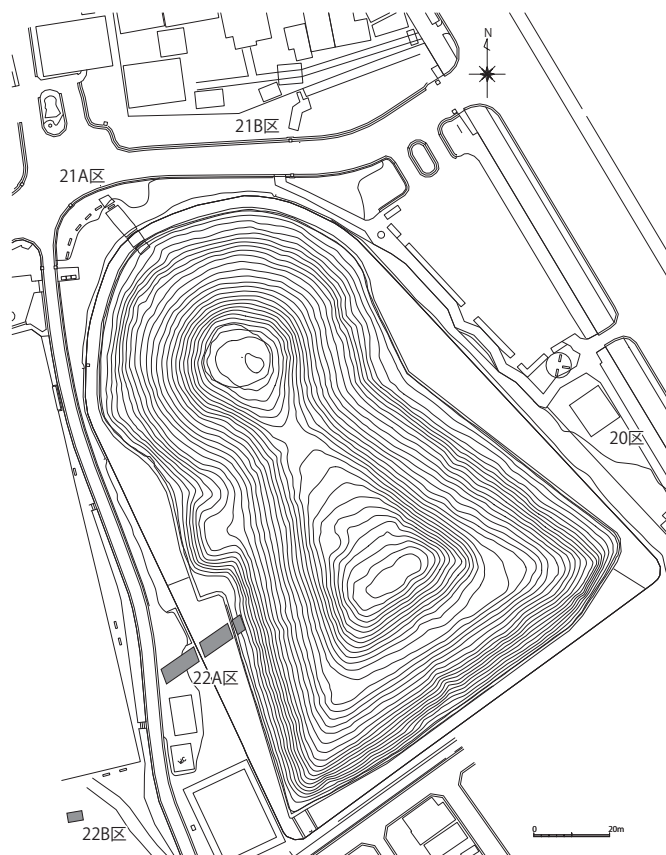
古墳の周辺には縄文時代の遺跡として玉ノ井遺跡、弥生時代の遺跡として高蔵遺跡、古墳時代後期の古墳として全長約70mの前方後円墳である白鳥古墳、古墳時代中期から後期を中心とする古墳群として高蔵古墳群が分布する。

2 2 A 区 22A区は史跡指定範囲である後円部最下段の墳丘部分と墳丘を囲う玉石垣間から指定範囲外の部分にかけて設定した。

墳丘部分は表土付近から円筒埴輪が散在して出土した。玉石垣間は基盤層まで剝離されていた。

指定範囲外の部分は濠状に浅く落ち込む状況を確認したが、中世以降に掘削、排土、整地が繰り返されたようで、周濠の南西岸付近は近世の大溝が掘削されていた。近世の整地層、溝内からは若干の円筒埴輪が出土した。

(早野浩二)



調査区位置図

ごうなか
郷中遺跡 (本発掘調査B)

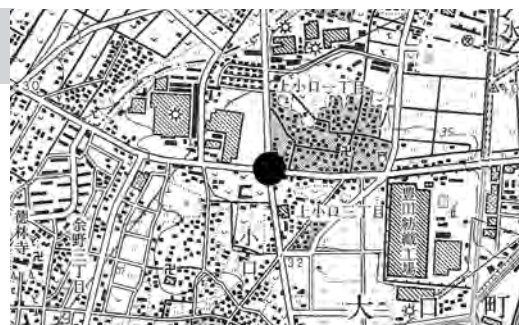
所在地 丹羽郡大口町上小口一丁目地内
(北緯35度20分48秒 東経136度55分03秒)

調査理由 交差点改良工事 (一般県道斎藤羽黒線)

調査期間 令和4年7月～9月

調査面積 370㎡

担当者 堀木真美子・武部真木



調査地点 (1/2.5万「犬山」)

調査の経過 調査は、交差点改良工事 (一般県道斎藤羽黒線) に伴うものであり、愛知県建設局道路維持課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行った。調査対象地は上小口交差点の東西方向道路の北側にあたり、交差点を挟んで西側をA区、東側をB区と設定した。調査面積は計370㎡である。

立地と環境 大口町は尾張北部の犬山扇状地の扇央部に立地し、遺跡は隣接する扶桑町との境界に近い市域の北部に位置する。標高は31m前後である。近辺には多くの遺跡が分布し、旧石器時代の西山神遺跡や縄文時代の下林遺跡、後期古墳の善光寺古墳などが知られている。

調査の概要 A区の東端は小規模の谷状地形であり、これより西側に縄文時代中期後半の竪穴建物5棟、貯蔵穴の可能性のあるやや大型の土坑3基、中世の溝・土坑が確認され、縄文土器・石器、須恵器・土師器・陶磁器類が出土した。B区は後世の改変が激しく、主に近世から現代の遺構と思われる石列を伴う落ち込みや土坑・ピット等が見つかっている。

A区竪穴建物のうち遺存状況の良好な086SIは、当初径約8m規模の円形に近い隅丸方形のプランと検出されたが、少し位置の異なる竪穴建物の重複と判明した。竪穴の深さは検出面から約40cm、床面側壁際に幅20cm程度の壁溝 (099SD) が巡る。より内側にも並行する溝 (098SD) があり、先行する竪穴の痕跡として認められる。近接して086SIに先行する竪穴建物2棟が壁溝 (073SD, 074SD) で確認でき、さらに西へ約20m離れた地点にも一辺約4.0m規模の隅丸方形の壁溝 (010SD) が確認された。遺物を伴う遺構は限定的ではあるものの、縄文時代中期後半を中心とした土器深鉢と数点の石器が出土している。

まとめ この一帯で活発化する縄文時代中期後半の集落の様相を伝える良好な事例となると考えられる。

(武部真木)



A区 竪穴建物 (086SI 西から撮影)



縄文時代中期深鉢 (085SK 縮尺1/6)

しもしなの
下品野遺跡 (本発掘調査B)

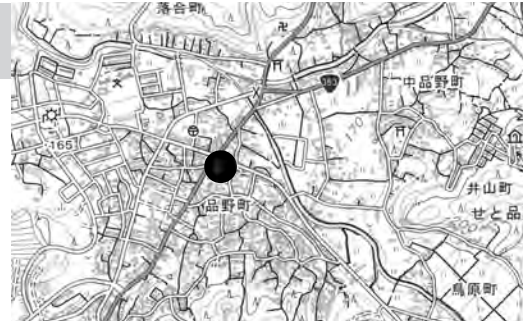
所在地 瀬戸市品野町五丁目地内
(北緯35度14分55秒 東経137度07分29秒)

調査理由 主要地方道瀬戸環状線交差点改良工事 (交付金)

調査期間 令和4年5月～令和4年7月

調査面積 300㎡

担当者 樋上 昇・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「猿投山」)

調査の経過 本遺跡の調査は、主要地方道瀬戸環状線交差点改良工事 (交付金) にともなう事前調査として、愛知県建設局道路維持課 (尾張建設事務所) より愛知県県民文化局を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、令和4年5月～同4年7月に調査を実施した。調査区は国道248号と県道22号瀬戸環状線が交差する品野町6丁目交差点の南東側にある。調査面積は300㎡で、北側から順に22A区～22C区に分けて調査した。

立地と環境 下品野遺跡は瀬戸市北東部にある品野盆地の南東緩斜面にあり、北東から流れる水野川と南東から流れる鳥原川が合流する地点の南にある。遺跡周辺は古代末から現代にかけての陶器・磁器を生産する窯が数多く営まれた地域で、名古屋方面の南西から長野方面の北西にのびる中馬街道が巡っている。

調査の概要 今回の調査では、飛鳥時代～奈良時代と戦国時代、江戸時代後期～近代の主に3時期の遺構と出土遺物が確認できた。

(1) 飛鳥時代～奈良時代

竪穴建物1棟と土坑1基を確認することができた。竪穴建物007SIは22A区の南端部にて検出でき、昨年度に確認された21G区133SKの北につながる。竪穴建物は平面方形のもので、一辺4m程になる。西側の壁にカマドの一部と思われる粘土塊が確認された。土坑045SKは22B区にて確認できた幅0.53m、長さ1m以上を測る平面楕円形のもので、深さは0.30mであった。出土遺物には須恵器杯、壺、甕、土師器甕などがある。

(2) 戦国時代

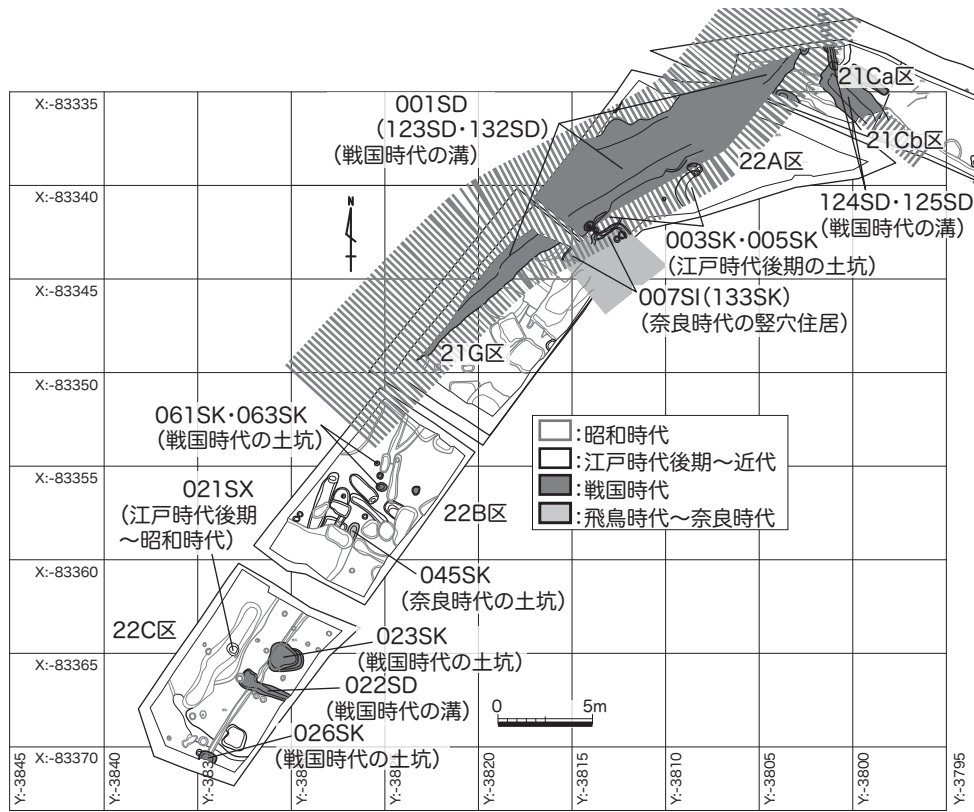
溝2条と土坑4基を確認することができた。溝001SDは22A区の西側を北東から南西に流れる溝で、昨年度確認された21Ca区123SDと21G区132SDとつながる。001SDは幅6mを超える断面逆台形の溝で、深さは遺構面から1.22mを測る。001SDは南にある22B区の西を流れる。22C区中央部にて確認された022SDは幅0.70m、深さ0.12mの浅い溝で、西側は途切れていた。22C区の南端で検出された土坑026SKは、平面が隅丸方形状で東西0.90mを測る。瀬戸美濃産陶器の灰釉緑釉小皿と土師器皿が重なった状態で出土した。出土遺物には瀬戸美濃産陶器の天目茶碗、皿、播鉢、壺、筒形製品、土師器皿などがある。

(3) 江戸時代後期～近代

土坑5基を確認できた。22A区で確認された003SK～006SKは江戸時代後期～近代の一連の土坑で、003SKは長さ2m、幅1m以上の大型土坑である。003SKからは土坑の南西側から廃棄され状態で、瀬戸美濃産陶磁器の碗、皿、徳利、播鉢などが多数出土した。

まとめ 今回の調査により、下品野遺跡における古代の集落が品野町六丁目交差点の西側に展開することが明らかとなった。また、戦国時代の集落も、溝001SDの南西側に広がるものと思われる。

(蔭山誠一)



下品野遺跡遺構平面図 (1:400)



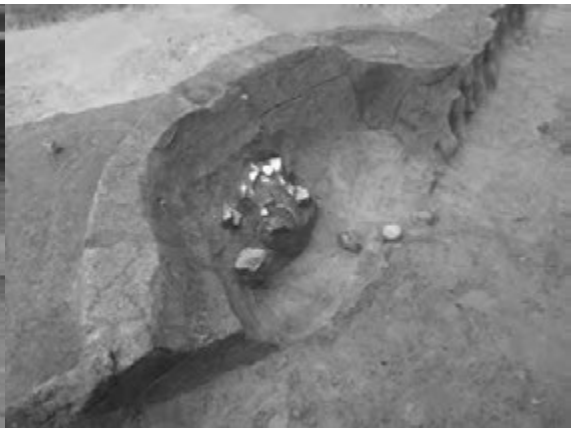
22A区全景 (南上空より)



22A区001SD (北東より)



22C区007SI (北より)



22C区026SK (北より)

かめづか なかはざま
亀塚・中狭間遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市桜井町・川島町地内
 (北緯34度55分05秒 東経137度05分53秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年8月～令和5年2月

調査面積 3,220㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作・池本正明



調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。調査区は亀塚遺跡から北の中狭間遺跡までが連続しており、中狭間22A区と亀塚22G区間で遺跡が分かれる。調査区は、亀塚遺跡が亀塚(2AKZ)22A～22G区、中狭間遺跡が中狭間(2ANH)22A～22E区として設定された。調査面積は、亀塚遺跡が1,000㎡、中狭間遺跡が2,220㎡である。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁の崖下を南流する鹿乗川沿いの沖積低地の微高地に立地し、標高は中狭間22A区で約8.3m、これに対して亀塚22D区では約8.2mである。両遺跡は鹿乗川流域遺跡群(北群)の一部を構成しており、特に亀塚遺跡は鹿乗川(旧河道)と台地開析谷から流出する小河川(西町支線)が合流する地点に位置している。

調査の概要 中狭間遺跡では弥生時代中期後葉～弥生時代末期、古墳時代前期、平安～鎌倉時代の遺構と遺物が確認されている。ただし時代によって分布状況は異なり、弥生時代は主に調査区域南部(22A～C区)、古墳時代前期は同北部(22C～E区)に偏る傾向があり、平安～鎌倉時代の遺構はほぼ全域で分布している。以下、調査区ごとに概要を示す。(永井邦仁)

2 2 A 区 中狭間22A区は主な遺構は弥生時代の方形周溝墓3基と平安時代末期の井戸1基である。
方形周溝墓 方形周溝墓は3基確認されている。まず調査区南側の131SZは、北東溝(029SD)と南東溝(025SD)を検出している。025SDが北側で屈曲して029SDの東側と接続し、南側は壁面付近で幅が狭くなることや、029SDが調査区西壁付近で急に浅くなることなどから、調査区内でほぼ南北の対角線以東を検出したものと想定できる。想定される規模は一边10m程度で、周溝は、029SDが幅3.6m、深さ1.3m、025SDは幅1.8m、深さ0.9mとなる。出土遺物は乏しいが、025SD・029SDの基底部付近では、弥生中期のほぼ全形がうかがえる細頸壺を含む土器片が十数点出土しており、029SDからは弥生時代終末期～古墳時代初頭の高杯脚部と、ほぼ同時期と思われる木製品も出土している。現在検討中ではあるが、弥生時代中期に築造され、終末期～古墳時代初頭に再利用された可能性が高い。なお、周溝の埋没は緩やかに進行したものと考えられ、窪地を利用して029SDの中央には017SD、025SDの上面にはやや不整形な形状となる026SDが掘削されている。いずれも埋土中には山茶碗片が点在しており、中世以前に掘削されたものと考えられる。

1 3 0 S Z 次に調査区中央の130SZは、一边約6.0mのやや不整形な隅丸方形となる。周溝は074SDで幅0.8m、深さ0.3mを測る。ただし時期を想定できる資料に恵まれていない。

1 2 9 S Z 3基目は調査区北側の129SZで、北溝が095SD、東溝が093SD、南溝と西溝は屈曲する092SDで構成され、一边8m程度となる。095SD東端と093SD北端が陸橋部となり、幅は2m程度となる。周溝は095SDが幅1.5m、深さ0.6m、093SDは幅1.8m、深さ0.6mをはかる。092SDは幅1.0m、深さ0.5mとなるが、陸橋部の対角線上となる屈曲部では幅0.4m、

深さ約1.0mと狭くなる。出土遺物は093SDからややまとまった量を得ているが、注目できる資料に赤色顔料の付着した台石・鉢がある。このうち鉢は、弥生時代終末期～古墳時代初頭に属する。

- 1 4 2 S K この他に、特徴的な遺構として142SKがある。調査区南端で検出された土坑で、ほぼ全形をとどめる弥生時代中期後葉の壺が、口縁部を北西方向に向けた状態で出土している。
(池本正明)

中 世 井 戸 井戸100SEは直径約3.0m、深さ約1.6mの土坑状であり、井戸として機能しなくなった後に井戸側や曲物などを撤去するために掘り返されており、そこへ山茶碗類(碗と小皿)と土師器伊勢型鍋が廃棄された状態であった。井戸の所在地は基盤層が砂質～粘質シルトであるが、井戸の最下部は細粒砂層であり湧水層となっている。

古墳周溝か 中狭間A～C区にかけて延びる溝(22A区106SD・22B区015SD・22C区073SD)は浅い皿状の断面をしているが、平面形は屈曲する区画溝の一部と考えられる。出土遺物は少ないが古墳時代の土師器や上層で須恵器杯身が出土している。古墳周溝の可能性はある。

2 2 C 区 中狭間22C区は、調査区北東部を近世の池状遺構が占めており、その西側に取り付く小溝がある。それ以外は方位の異なる小溝が北東～南西方向に延びており、池はそれ以降に掘削されたものと考えられる。小溝からは土師器が主体であるが若干の山茶碗類が出土していることから中世の耕作地にもなって施工された区画である可能性がある。そして小溝群に先行する竪穴建物跡7基が検出されている。これらは調査区北端と中部で重複関係のある群構成で検出される傾向にある。一部(053SI)では小型ながら幅広周溝状掘り方が確認されている。出土遺物は寡少なながら古墳時代前期と推測される。

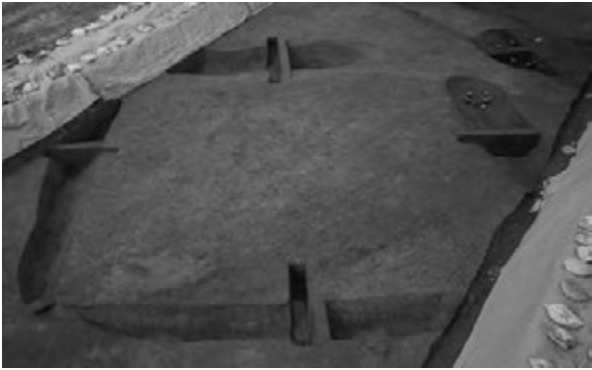
2 2 D・E 区 中狭間22D区・22E区でも山茶碗類の出土する溝群が検出されており、これらも22C区同様に正方位から30～40°振れた斜方位となっている。とりわけ22E区037SDは幅約1.3m、深さ約0.7mで最大規模となっている。出土遺物には「大」と墨書された山茶碗がある。また22C区と同様に竪穴建物跡6～8基が検出されており、173SIや180SIでは幅広周溝状掘り方が確認されている。

亀 塚 遺 跡 亀塚遺跡は弥生時代中期～弥生時代末期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構と遺物が確認されている。

中狭間遺跡に南接する22G・F区では、亀塚22A区のような弥生時代中期の壺が出土する凹地地形がみられ、そこから南側では周溝墓がないなど様相が異なっており、両遺跡の境界に当たると考えられる。

2 2 F 区 亀塚22F区では、長径約3.5m、短径約0.8m、深さ約0.9mを測る長楕円形の大型土坑124SKがある。壁面はほぼ直立している。炭化物を多く含む埋土であり、底部から弥生時代中期の壺口縁部が出土している。当該土坑以外には竪穴建物跡1基と竪穴状遺構2基、また時期不明ながら掘柱穴が10基以上検出されており、掘立柱建物を構成するものと考えられる。

2 2 D 区 亀塚22D区では、西隣の20A区から続く奈良～平安時代の溝129SDがある。底部付近で若干のラミナ状堆積がみられるので水流があったことになる。遺物は奈良時代の須恵器蓋やK-90号窯式期の灰釉陶器が出土している。この他にも弥生土器の出土する溝020SDなどがある。
(永井邦仁)



中狭間22A区方形周溝墓129SZ(南東から)



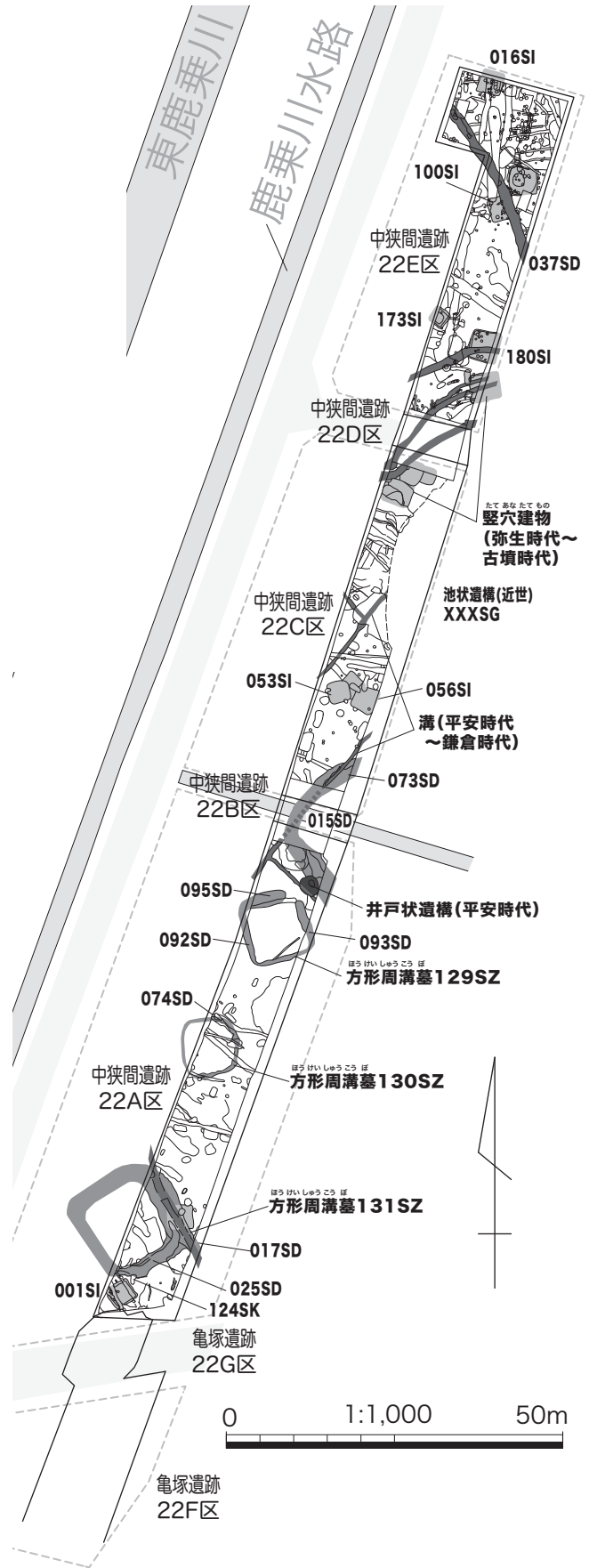
中狭間22A区方形周溝墓130SZ(南東から)



中狭間22A区方形周溝墓131SZ(南東から)



中狭間22A区土坑124SK出土の弥生時代中期の壺(北西から)



中狭間遺跡の概要



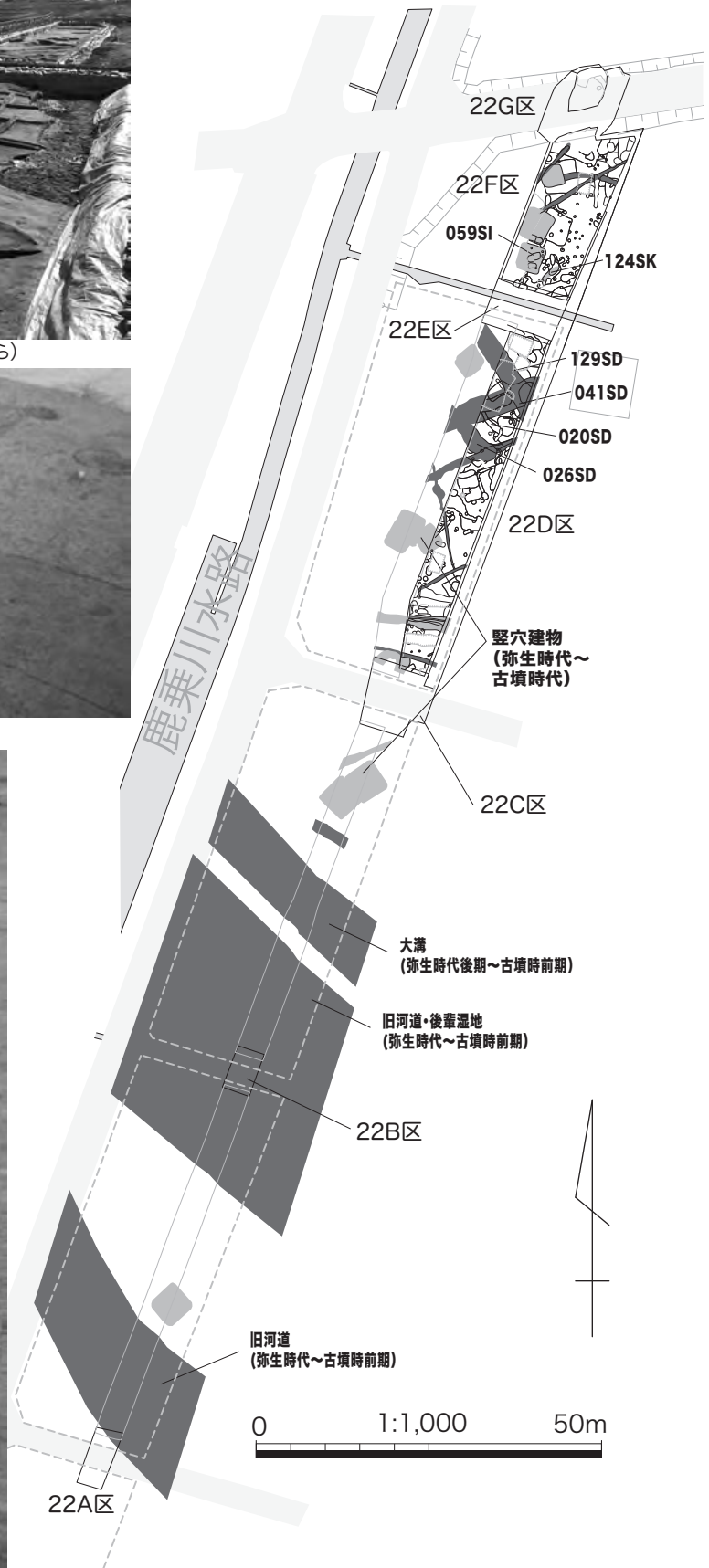
亀塚22F区(手前)・同D区(奥)全景(北西から)



亀塚22F区土坑124SK(南西から)



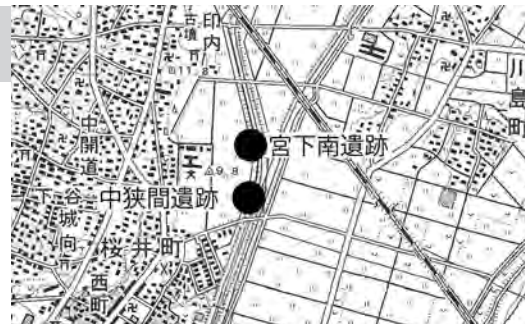
亀塚22D区溝状遺構020SD(北西から)



亀塚遺跡22D区・22F区の概要

なかはざま みやしたみなみ
中狭間・宮下南遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市桜井町地内
 (北緯34度55分25秒 東経137度05分58秒)
調査理由 中小河川改良工事
調査期間 令和4年6月～7月
調査面積 120m²
担当者 樋上 昇・池本正明・田中 良



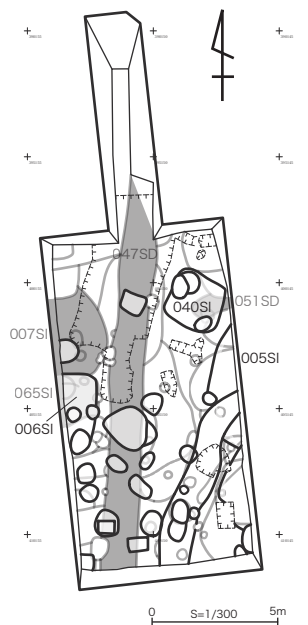
調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査面積は計120m²である。遺跡の北側には、当センターによって平成23年度と平成25年度に調査された宮下遺跡がある。

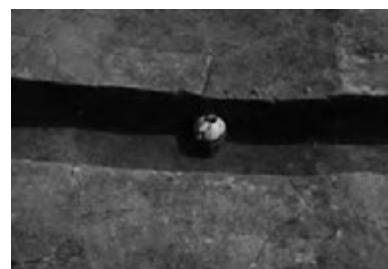
立地と環境 遺跡は、鹿乗川と西鹿乗川が合流する地点で、標高約8mの沖積地上に立地する。周辺には、碧海台地縁辺に沿って古井遺跡群や桜林遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡が並び、二子古墳や比蘇山古墳などの古墳が作られている。調査地点は、宮下南遺跡と中狭間遺跡の境に位置する。

調査の概要 調査は、にぶい黄褐色シルト層の上面で遺構が検出されたため、この面で調査を開始したが、この面の遺構よりも下位に、沈鉄を多く含む黒色土の埋土をもつ遺構が複数検出されたため、2面目を設定し、再度遺構検出をおこなった。その結果、前者の1面目では灰釉陶器を主体とした平安時代の竪穴状遺構(005SI・006SI・040SI)などを検出し、後者の2面目では、弥生時代終末期から古墳時代の大溝(047SD)や古墳時代の竪穴状遺構(007SI・065SI)などが検出された。

047SD 047SDは、弥生時代終末期の大溝で、掘り方の底面がV字状になる。この溝は、古墳時代に掘り返されており、上層の埋土からは、須恵器の蓋杯が出土している。下層の埋土からは、弥生時代終末期の小型壺や高坏などが出土している。(田中 良)

中狭間・宮下南遺跡の遺構全体図
S=1/300

大溝 047SD 完掘 (南から)



大溝 047SD 弥生土器出土状況



竪穴状遺構 065SI 完掘 (南から)



溝 051SD 弥生土器出土状況 (西から)

しもかけ よせじま
下懸・寄島遺跡(本発掘調査A)

所在地 安城市小川町地内
(北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年6月

調査面積 95m²

担当者 樋上 昇・池本正明・田中 良



調査地点(1/2.5万「安城」・「西尾」)

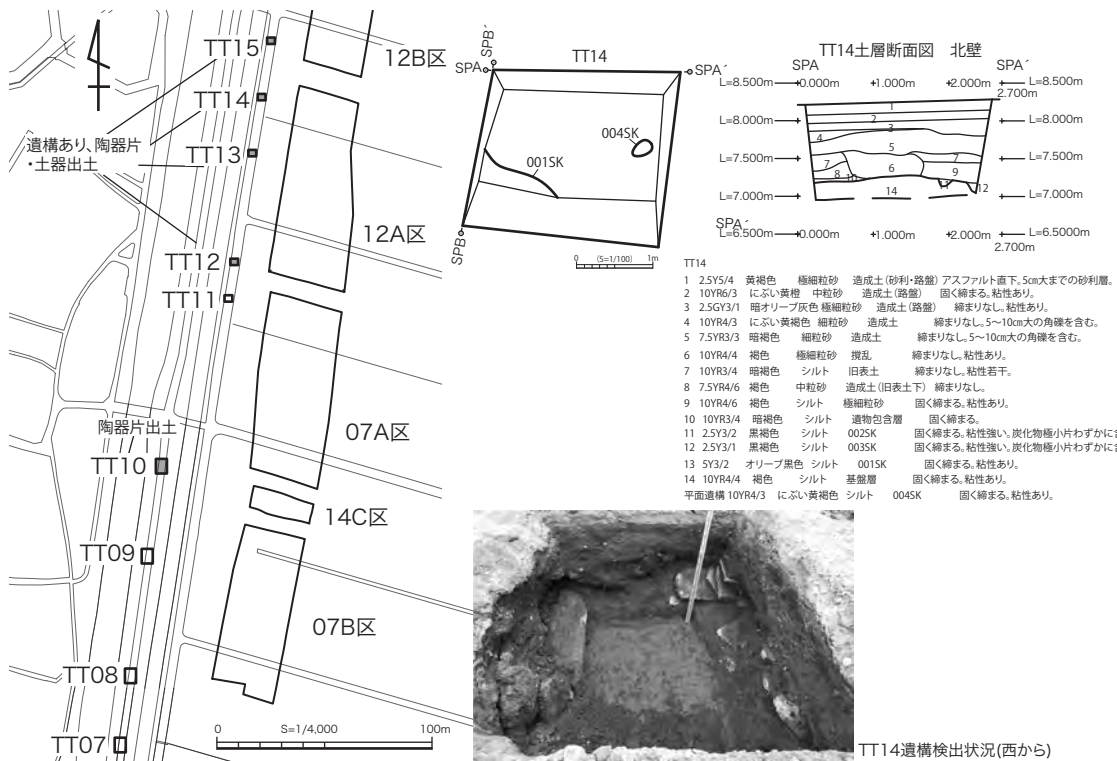
調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査地点は、鹿乗川左岸と中堤防の事業予定地に、3m×6m、3.2m×5m、2m×2.5mのテストトレンチ(TT)を9箇所設定して、遺構と遺物を検出するとともに土層の状況を確認した。

立地と環境 遺跡は矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する。遺跡の西方、鹿乗川右岸の碧海台地上には、前方後円墳の姫小川古墳をはじめとする、この時期の古墳群が展開する。

調査の概要 調査は、鹿乗川の中堤防に3m×6mのトレンチを3箇所、3.2m×5mのトレンチを1箇所設定し、鹿乗川左岸に2×2.5mのトレンチを5箇所設定し調査をおこなった。その結果、TT07～TT11では、攪乱によって遺構面が壊されていたが、TT12～TT15では、造成土の下に標高7.3m付近から遺構面が確認され、その遺構面から土坑が検出された。また、細片ではあるものの、土器片も出土している。

まとめ 今回の調査では、中堤防と左岸の一部は攪乱によって、遺構面は確認できなかったものの、左岸は残りが良くこれまでの調査と同様、古墳時代の遺構が展開する可能性が高い。

(田中 良)



下懸・寄島遺跡の本調査 A 概要図 S=1/4,000、TT14 平面図・土層断面図(S=1/100)

よせじま
寄島遺跡 (本発掘調査B)

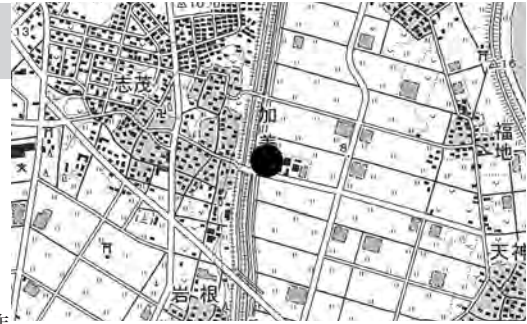
所在地 安城市小川町地内
(北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年5月～令和5年3月

調査面積 1,045㎡

担当者 樋上 昇・永井邦仁・池本正明・田中 良・木村有作



調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成19年度から調査を開始し、今年度で6度目である。今年度は、加美橋の中堤防と左岸の道路部分と水路部分の調査をおこなった。調査区は中堤防を22A区、道路部分と水路部分は南から22B区～22E区を設定し、調査面積は計1,105㎡である。

立地と環境 遺跡は矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する。遺跡の西方、鹿乗川右岸の碧海台地上には、前方後円墳の姫小川古墳をはじめとする、古墳時代前期の古墳群が展開する。現在の鹿乗川は、碧海台地東辺を直線的に南流し、川の左岸である遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡・惣作遺跡・姫下遺跡で旧河道の一部が確認されている。当該遺跡は、この旧河道の周辺の微高地に展開し、標高は約7mを測る。これまでの調査では、主に古墳時代前期の集落跡と墓域が検出されている。

調査の概要 今年度の調査は、過去に調査区の間を調査する形で、14B区と14C区、07A区の間(22B区)と07A区と12A区の間(22C区)、12A区と12B区の間(22D区)、12B区と13A区の間(22E区)と新規の22A区の調査をおこなった。ここでは主に、22B区の調査成果を記述する。

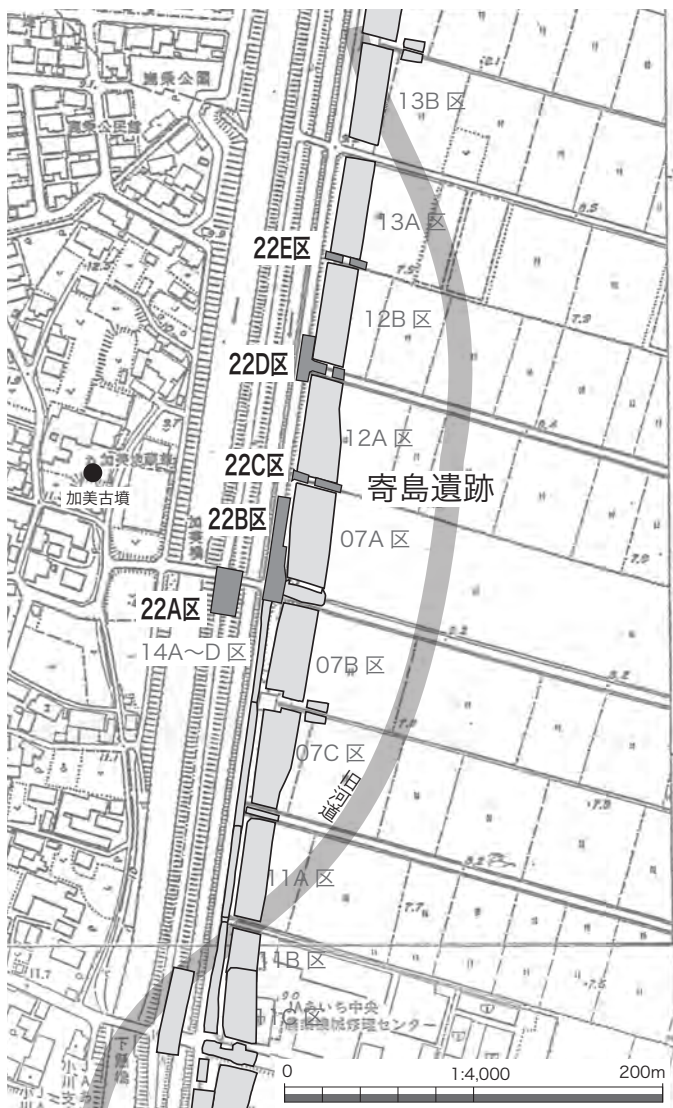
22B区では、K層(平安～中世の遺物包含層)を掘削したのち、その下層のシルト層上面で遺構検出をおこなった。その結果、弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴建物跡3基と大小の溝群などが検出された。

0 6 6 S I 066SIは、14C区から続く竪穴建物跡で、平面形は隅丸方形で壁溝を伴い、掘り方は幅広周溝状となる。建物の4分の1が検出され、床面で甕や線刻文土器が出土し、掘り方からは手焙り形土器が出土している。

0 3 5 S K 035SKは、066SIの上位から掘り込まれた土坑で、炭化物と台付甕など古墳時代前期の土器が多量に出土した。ただし、土器は小片となったものが大半である。

0 9 5 S D 14C区から続く、方形の区画溝である。溝は掘り返されており、場所によって掘り返し形状が異なる。①浅く(約15cm)皿状の掘り込みに基盤層(灰白色砂質シルト)主体の埋土と②溝中央部を深く(約30cm)掘り込み黒褐色シルトと基盤層ブロックの混合、その上に黒褐色粘質シルトの埋土のものである。いずれの埋土も、古墳時代前期の土器器を含む。

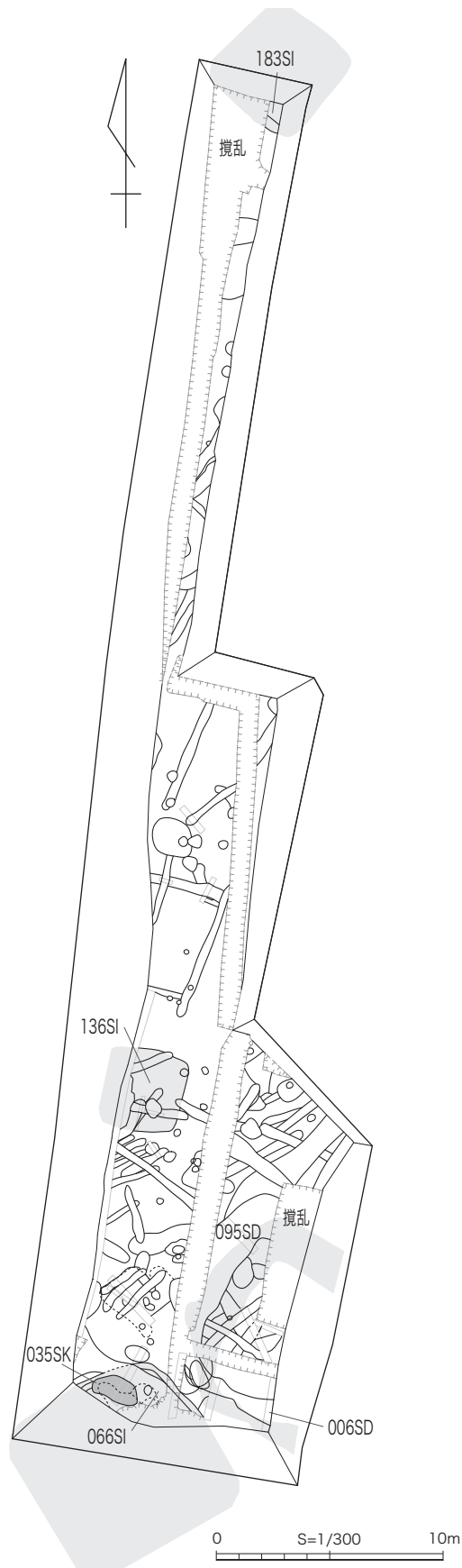
1 8 3 S I 183SIは、調査区の北東端に位置し、壁周溝(幅約15cm)と床面の一部がわずかに検出された。床面は炭化物が多く含まれているが、遺物がわずかに出土したのみで、時期は不明である。掘り方は床面から10cmほど下がる。(田中 良)



寄島遺跡の調査区配置



22B区 066SI出土の線刻土器



22B区の主要遺構

寄島遺跡 22B 区遺構全体図 S=1/300

むかいだ
向田遺跡 (本発掘調査B)

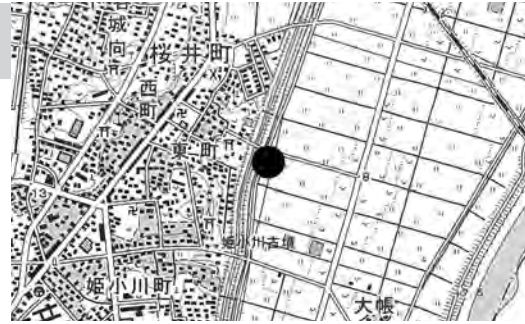
所在地 安城市東町秋葉下
(北緯34度55分03秒 東経137度05分51秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年11月

調査面積 530㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作・池本正明



調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。調査面積は530㎡である。当該遺跡ではこれまでに平成29年度に計1,524+㎡の発掘調査を行っている。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁から下った沖積低地に立地し、標高は約8.3mである。西方の碧海台地上には獅子塚古墳 (古墳時代前期) が立地する。

調査の概要 調査対象地は標高約7.3mに近世後半の遺物を包含する耕作土がある。その下位で顕著な遺構は検出されず、調査区南部において古墳時代前期～鎌倉時代の土師器・須恵器・山茶碗を包含する黒褐色粘土層が認められ、長らく沼地であったことが明らかとなった。一方調査区北部では、中粒砂の連続する側方堆積があることから河川堆積で形成された微高地と考えられる。ただし当該層からの出土遺物はないので形成時期は不明である。このように向田遺跡の大半は沼地または河道であり、亀塚遺跡以北と姫下遺跡以南を区分する境界のような場所であったと考えられる。
(永井邦仁)



向田遺跡における河川堆積の断面

ひめした 姫下遺跡(本発掘調査B)

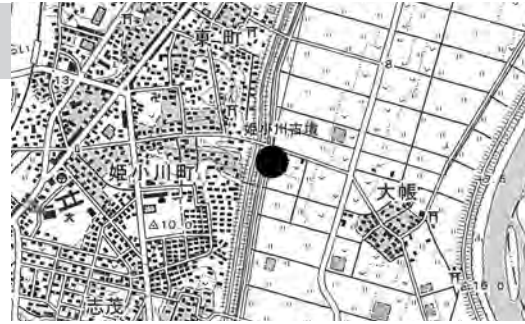
所在地 安城市姫小川町地内
(北緯34度54分45秒 東経137度05分47秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和5年1月～3月

調査面積 595㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作

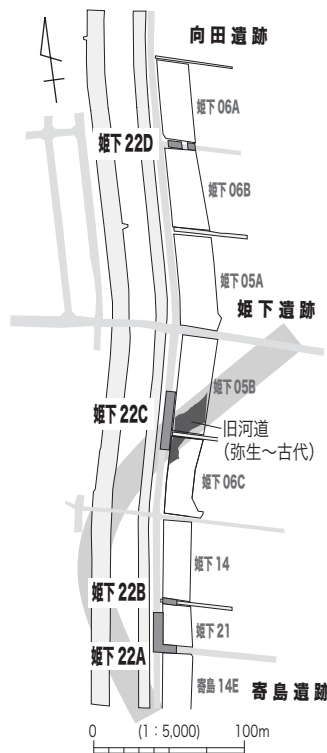


調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。当該遺跡では平成17～令和3年度に発掘調査がなされており、今年度は市道や用水路部分において4調査区が設定された。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁から下った沖積低地に立地し、標高は約7.0mである。遺跡西方約100mの台地上には姫小川古墳(古墳時代前期)が立地する。

調査の概要 22A区・22B区では、土師器と須恵器を包含する暗褐色～黒褐色シルト層下の基盤層上面で遺構が検出された。ただしその数は少ない。遺物の時期は古墳時代前期後半を中心としていることから、05A区・05B区・06C区から連続するものと位置付けられるが、比較的集落縁辺の状況を示唆する。これは、当該調査区の西側に南西方向に延びる台地の開析谷があり、そこからの支流との合流点によって不安定な地形になっていたことに起因すると思われる。一方、22C区は弥生～古代の旧河道の延長上となっている。(永井邦仁)



調査区配置と22A区の状況

たぎせ 滝瀬遺跡 (本発掘調査B)

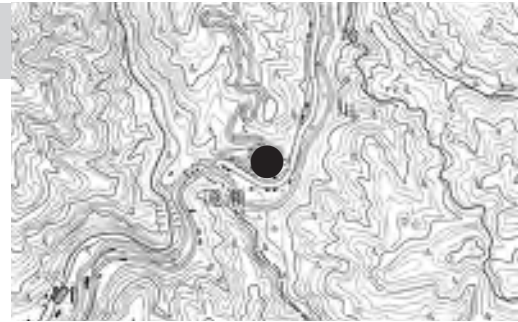
所在地 北設楽郡設楽町八橋タキセ
(北緯35度07分12秒 東経137度34分52秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年11月～令和5年1月

調査面積 1,395㎡

担当者 永井宏幸・鈴木恵介



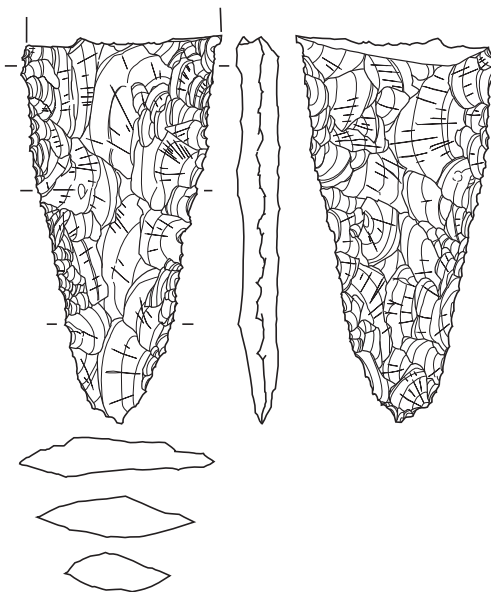
調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダムに伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。

立地と環境 滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘から丘陵斜面に立地する。本調査区は遺跡の中で最も境川の下流部分に位置する。現地表面の標高は421mで、調査で検出された基盤層の標高は419.5m～417mである。本調査区の基盤層は、近現代の耕地造成に伴って削平されたか、北側上位斜面にある2018A区で検出された谷状地形の影響を受けたと考えられる。

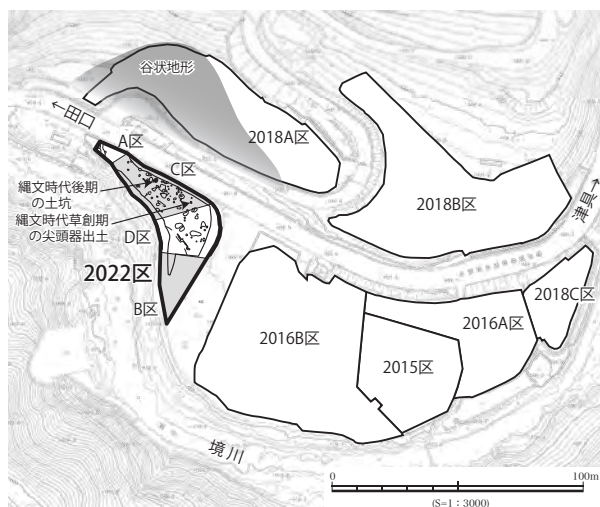
調査の概要 調査は、排土処理の都合上、A～Dの4区に分けて実施した(下図)。A・D区は基盤層が緩やかに傾斜しており、C区北壁沿いの平坦面付近では縄文時代後期の土坑1基(2016SK)、別の土坑(時期不明・2062SK)から縄文時代草創期の尖頭器(基部)を検出した(右図)。これらはC区中でも標高の高い位置で検出されている。同じC区内でも南半部は川に向かって傾斜が強くなり遺構は減少する。他のA・B・D区はC区北半部よりも標高が下り、遺構の検出数は減少する。今年度の調査区の中でも遺構の残存状況の差が明確にうかがえる結果となった。

(鈴木恵介)



0 10cm

土坑2062SK出土尖頭器(実測・川添 S=1/2)



滝瀬遺跡調査区配置図(S=1/3000)



滝瀬遺跡全景 (2022区は中央左下)

まさのさわ
マサノ沢遺跡 (本発掘調査B)

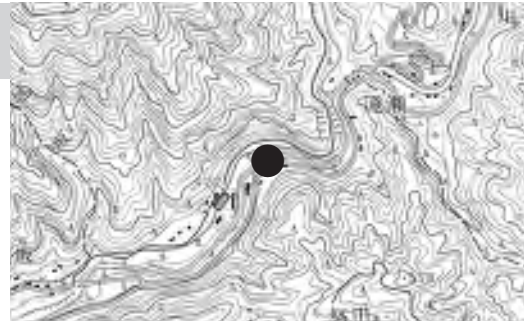
所在地 北設楽郡設楽町小松字マサノサワ
(北緯35度07分04秒 東経137度34分35秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年12月～令和5年2月

調査面積 1000㎡

担当者 永井宏幸・社本有弥



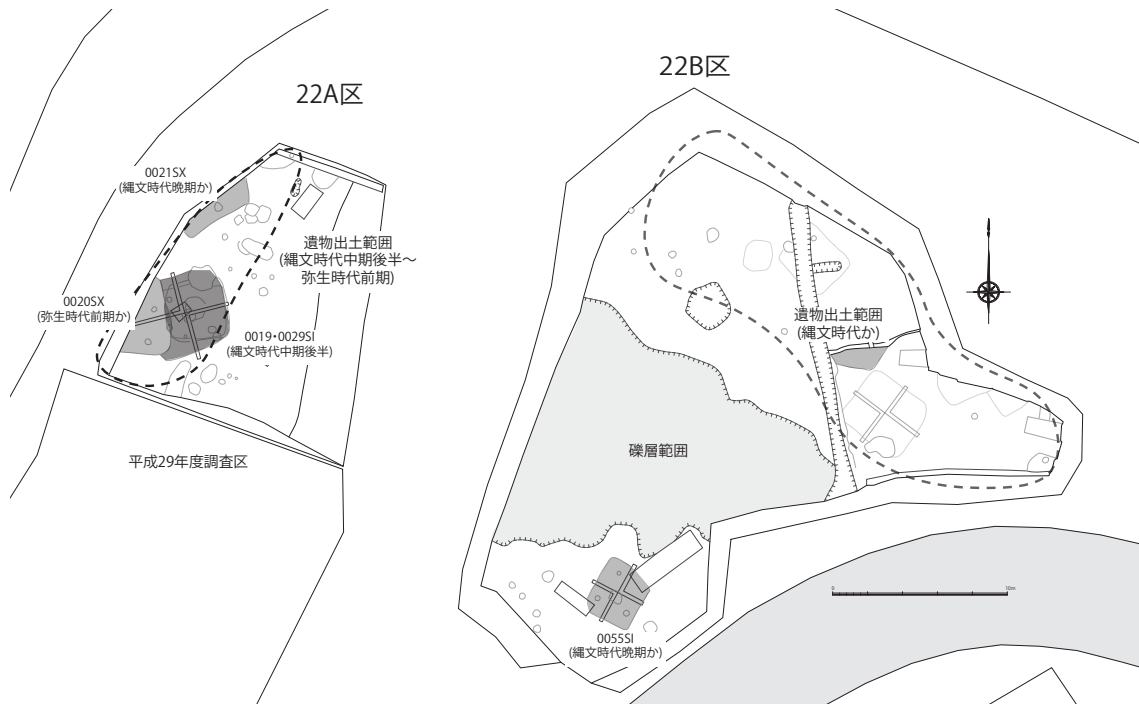
調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダムに伴う事前事業として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県県民文化局を通じた委託事業として、令和4年12月から令和5年2月にかけて実施した。調査区は上段・下段に別れており、下段を22A区、上段を22B区として調査を行なった。

立地と環境 遺跡は、豊川水系に属する寒狭川の支流である境川の左岸に形成された幅狭な段丘面に位置する。遺跡付近は山腹に造成された県道によって地形が改変されたものの、境川が大きく蛇行する地点にあたり、北東から南西にかけて広がる緩やかな緩斜面に立地する。

調査の概要 22A区は西側で遺構・遺物を確認した。特に堅穴建物跡0029SIは長径約70cm、深さ60cmの大型の石囲炉が見つかり、炉の埋土から縄文時代中期後半にあたる土器片が出土している。炉の東には炭化物と被熱した土が入った土坑状の落ち込みがあり、おそらく副炉のような施設があった痕跡ではないかと考えられる。

22B区では東部で遺物の出土があり、大型の土坑や堅穴状遺構が確認されている。0055SXでは埋土から縄文時代晩期の土器片が出土している。それ以外の遺構も縄文時代のものであると思われるが、時期のわかる遺物は確認されていない。(社本有弥)



マサノ沢遺跡全体図 (1/500)

しものべさか

下延坂遺跡 (本発掘調査B)

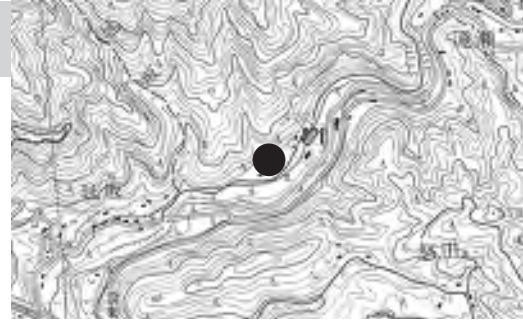
所在地 北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
(北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年6月～令和5年1月

調査面積 4,700㎡

担当者 永井宏幸・川添和暁・渡邊 峻



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和4年6月から令和5年3月にかけて実施した。調査面積は4,700㎡で、東を流れる境川と西の山側の町道79号の間に広がっている。北から順に22A区、22B区、22C区の三ヶ所に調査区を設定した。

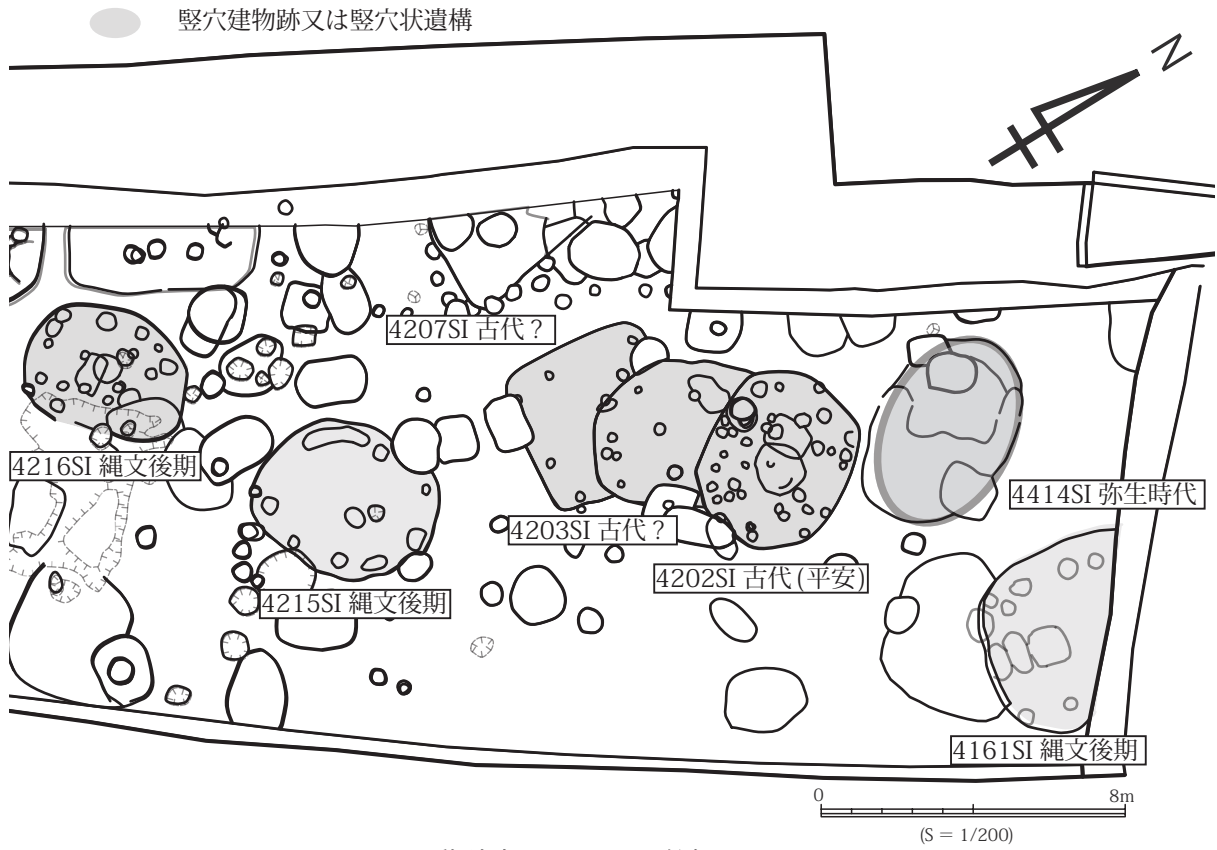
立地と環境 下延坂遺跡は境川右岸の川岸段丘から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡で、本年度の調査区は、昨年の下延坂遺跡の発掘調査における調査区21B区の西側と町道79号の間を22A区とし、22A区の南側から昨年の調査区21B区と21C区の続きの範囲の内、北側の突出部を22Ba区とし、残る南側を22Bb区、22Bb区の南側を22C区とした。22A区の調査区の大部分は山の斜面に沿った石垣が残る棚田により削平されている。22A区に続く22Ba区は昨年の調査区でも確認された、かつて調査区に存在した養鶏場のコンクリート基礎が存在し、22B区と22C区を含む南側は植林による杉林が形成されていた。また、22C区の南側には西の山側から続く沢が流れており、南に向かって傾斜している。

調査の概要 基本層序は第1・2層が調査区の北(22A区・22Ba区)と南(22Bb区・22C区)で若干異なる。北側の22A区と22Ba区は第1層が調査区西を走る町道79号に伴う盛土による1~2m近い整地層である。22A区の第2層は棚田に伴う20cm前後の耕作土の層となる。第3層は所々に土石流の痕跡が見受けられる無遺物層の40cm前後の茶褐色の砂礫層、第4層が褐灰色の20cm前後の砂礫層で、第5層が無遺物層の黄褐色の40cm前後の砂層である。また22A区の調査区西壁のセクションを観察した結果、北から南にかけて地形が傾斜していることが確認された。一方22Ba区は3m近い1層目の盛土で、第2層は60cm前後の黒褐色の砂層となる。第3層は22A区の第4層で確認した20~50cmの褐灰色の砂礫層、第4層が22Ba区の第5層である黄褐色の砂層となる。おそらく先に述べた地形的な傾斜により22Bbでは22A区の第2層まで道路工事の盛土によって削平されていると思われる。また、22Ba区の西壁セクションを観察すると、南から北にかけて傾斜している。22A区と22Ba区の境付近が一番深い谷状の地形と思われる。

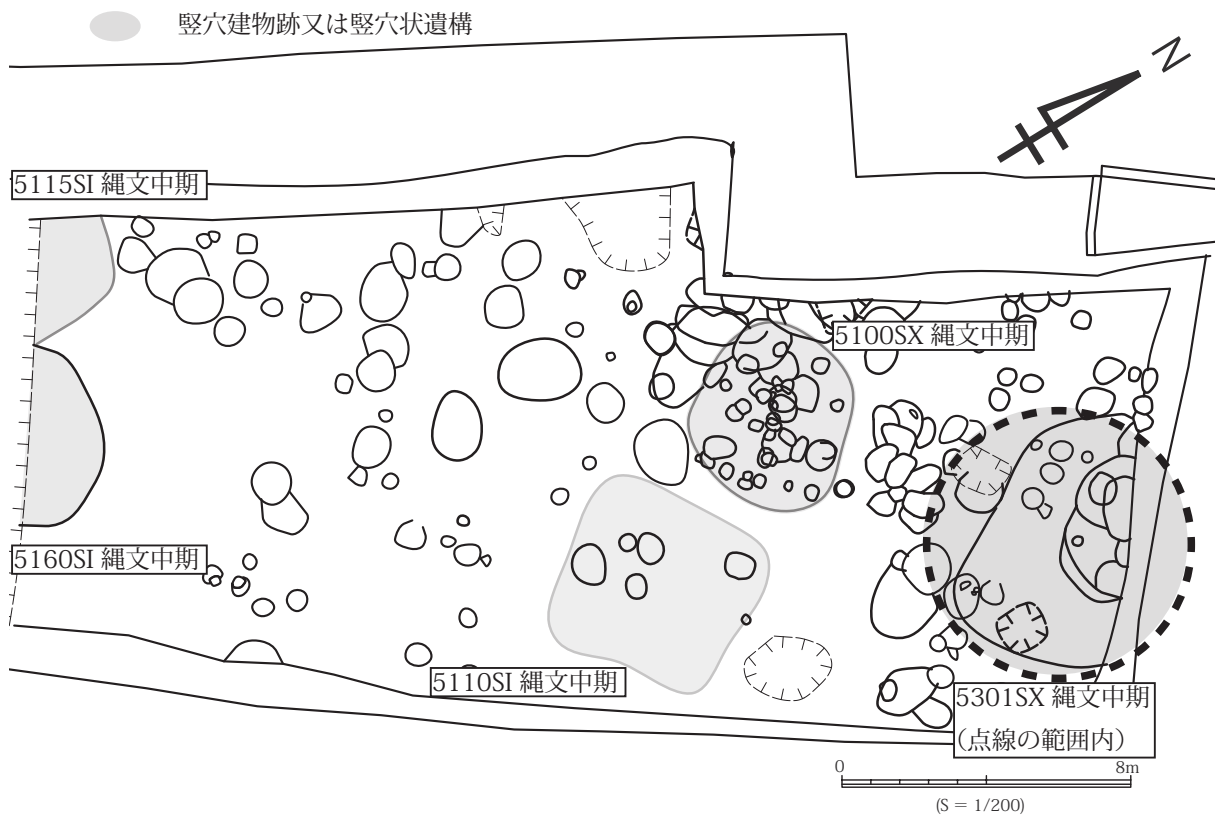
南側の22Bb区と22C区では北側のような道路の盛土は確認されないが、代わりに植林や(第1層)や畑作(第2層)によって削平されており、北で確認された褐灰色の層は一部までしか残っていなかった(第3層)。第4層の黄褐色の砂層は所々に土石流の痕跡があり、第5層の明黄褐色の礫層、地山の岩盤層と続く。22Ba区の黒褐色層が縄文時代後期、各調査区の褐灰色層が縄文時代中期、黄褐色の無遺物層が縄文時代前期、明黄褐色層が縄文時代早期を想定している。



下延坂遺跡 遺構全体図 1 面図 (S=1/1,250)



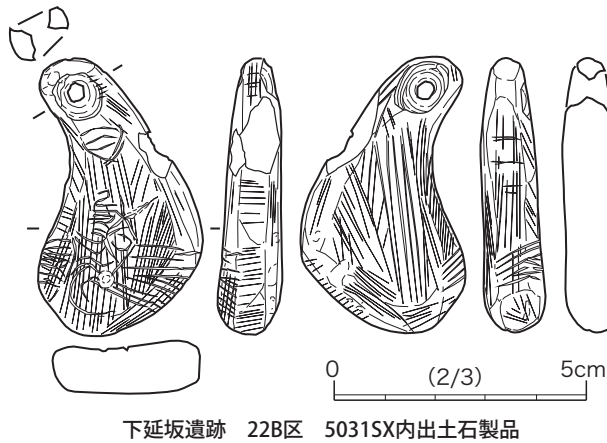
下延坂遺跡 22Ba 区 1 面目 略測図 (S=1/200)



下延坂遺跡 22Ba 区 2 面目 略測図 (S=1/200)

- 中 世 縦穴状遺構3001SXと3002SXは22A区の黒褐色の土層から検出された遺構であり、
- 2 2 A 区 3001SXが3002SXを切っている関係にある。遺構は22A区の調査区西壁に続いており、断
- 3 0 0 1 S X 面を確認した限りでは立ち上がりと底部で平坦面を確認し、弥生土器と思われる土器片
- 3 0 0 2 S X と石器も数点確認されたので当初は方形の縦穴状遺構が想定された。しかし、どちらの遺構も柱穴や炉跡などは床面で確認されず、3002SXからは山茶碗の小皿が確認されたので、中世の耕作地とそれに伴う耕作土であったと思われる。
- 2 2 B 区 4202SIは22B区北側の一面目の黒色の土層から、中央北寄りで検出された直径約4mの
- 4 2 0 2 S I やや楕円形な縦穴状遺構である。遺構の壁面に壁柱穴と思われる複数の土坑と、縦穴の中央北寄りに炭化物が比較的多い土坑が確認され、これが炉跡と思われる。この炉跡付近を掘削中に床面から灰釉陶器の高台が確認されたので、時期は古代(平安)と推測される。
- 2 2 C 区 炉跡6096SLは22C区と22B区の境付近で確認された直径約1m前後の遺構で、22B区1面
- 6 0 9 6 S L 目の中世の耕作域と同じ茶褐色の土層より確認された。炭化物と焼土が良好な状態で纏まって出土しており、鉄片が1点確認された。付近に縦穴や柱穴が確認されなかったので、屋外の鍛冶場遺構と思われる。
- 縄文後期 4161SIは22B区北側1面目の黒色土の層より検出された、昨年の調査区21B区との境に
- 4 1 6 1 S I 半分切られている縦穴建物跡である。直径は推定で4m以上の隅丸方形の形と思われる。複数の壁柱穴と炉跡と思われる炭化物を伴う土坑が検出され、複数の縄文土器の土器片(後期初頭)と石器(剥片)が出土した。
- 4 2 1 5 S I 4215SIは22B区北側1面目の中央南寄りの黒色土の層より検出された。直径4m前後の円形の縦穴建物跡である。複数の壁柱穴と、中央やや東寄りに炭化物を伴う炉跡と思われる土坑が確認される。遺物は少ないが、後期初頭の土器片と石器(剥片)が数点確認床面で確認されている。
- 4 2 1 6 S I 4126SIは22B区北側1面目の黒色土の層より検出された、直径3.5m前後のやや楕円形の縦穴建物跡である。複数の壁柱穴と、中央に炭化物をわずかに伴う炉跡と思われる小さな土坑が確認される。また、縦穴建物跡の埋土の中や4216SIを切る形で存在する土坑4373SKでは多数の拳大の礫が集中して検出されたことから、使い終わった縦穴に礫を廃棄していたのかもしれない。
- 2 2 C 区 6099SKと6100SKは22C区2面目の南東、茶褐色の土層で確認された良好な縄文土器の
- 6 0 9 9 S K まとまりを伴う土坑であり、直径1m前後の楕円形の6099SKを直径80cm前後の同じく楕
- 6 1 0 0 S K 円形の6100SKが切っている関係である。6099SKと6100SKはそれぞれ別個体の縄文土器を伴っており、時期はどちらも後期の土器と思われる。6099SKは縄文土器の下に複数の礫が確認され、意図的に礫を配置しその上に縄文土器を置いたようである。6099SKは更に2層に別れ、下層では被熱した拳大の礫が数点、同じく被熱した40cm前後の巨礫が出土し、焼土も確認された。石囲炉であったのを解体し、土器と共に埋めた可能性がある。

- 縄文中期** 5110SIは22B区北側の2面目の褐灰色の土層より検出された、直径3.5m前後の円形の
5110SI 堅穴建物跡である。壁柱穴と炉跡と思われる、石の抜き取り痕がある土坑が床面の中央やや南寄り
 で検出される。遺物は縄文時代中期後半と思われる土器片と石器(剥片)が数点確認され、堅穴の埋土より石棒
 と思われる円柱状の石器が炉跡の付近で確認された。
- 5100SX** 5100SXは22B区北側の2面目の中央付近、褐灰色の土層より検出された直径5m近い隅丸方形の遺構である。しかし5100SXでは複数の大型土坑に切られており、トレンチでは立ち上がりを確認できたのだが柱穴や炉跡などの付属施設は確認されなかった。5100SXは例年の下延坂遺跡の調査では例がないほど、多くの遺物が検出されている。いくつかは切っている複数の大型土坑に属するものであるが、床面の検出段階で凡そ80点近い遺物を点上げし、それ以上の数を一括遺物として取り上げた。縄文土器は縄文時代中期後半のものがほとんどで、石器は多数の剥片と、黒曜石の石鏃数点が確認される。またこの堅穴状遺構の床面で検出された50cm前後の土坑5255SKでは、5110SIで確認されたような石棒と思われる円柱状の石器が検出された。
- 5301SX** 5301SXは22B区北側の2面目の褐灰色の土層より確認された、多数の巨礫と遺物を伴う谷状の遺構である。22B区北側から22B区調査区の北側の境に向け広がっている。出土する遺物は縄文中期後半の土器片やそれに伴う石器が多い。石器は剥片や丸石、皿石などの他に、20点以上もの黒曜石の剥片と、1点の石鏃を確認した。また調査区の境の壁断面で確認できる谷状の落ち込みの一番下層からは、縄文時代後期のものと思われる土器片が纏まって出土している。たまたま落ちた可能性もあるが、その土器の周辺だけ別遺構が展開している可能性もある。残したベルトのセクションで確認したい(2月10日現在)。また、注目される遺物として、縄文時代中期後半の土器と一緒に出土した岩偶が挙げられる。詳しくは後述するが、この時代のものとしては貴重な資料である。
- 縄文早期** 5056SIは22B区の2面目の南端、茶褐色の土層より検出された縄文時代早期後葉と推定
22B区 される直径約3.5m前後の円形の堅穴建物跡である。22B区と22C区の調査区の境目にトレン
5056SI チを設定し掘削していた際に、茶褐色の土層より縄文時代早期の繊維土器が確認された。2021年度の下延坂遺跡の調査でも数点土器片が確認されていたので、周囲を精査したところ切り合い関係にある堅穴状の落ち込みが2棟確認された。5056SIはもう片方の堅穴建物跡5058SIを切っている堅穴建物跡である。トレンチの断面では床面と思われる平坦面と立ち上がりが確認されたが、残念ながら柱穴などの遺構や遺物は確認されなかった。
- 5058SI** 5058SIは22B区と22C区の2面目を跨る形で展開する、茶褐色の土層より検出された縄文縄文時代早期後葉と推定される直径約3m前後の円形の堅穴建物跡である。こちらも先の5056SIと同じように床面と立ち上がりは確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。
- 22C区** 6101SKは22Cの2面目の南東、茶褐色の土層で確認された良好な縄文時代早期後半の
6101SK 土器のまとまりを伴う直径30cm前後の土坑である。土器は礫に覆われており、意図的に礫を配置したと思われる。
 (渡邊 峻)



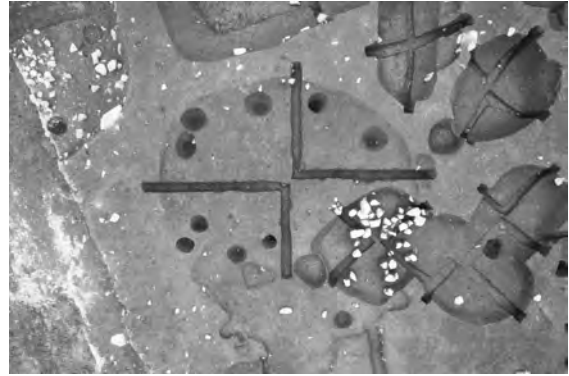
下延坂遺跡 22B区 5031SX内出土石製品

左図の石製品は、くの字に屈曲した扁平礫の表面を調整加工後、穿孔や線刻が施されているものである。調整は、一部側面の研磨を除き、剥片石器などによるケズリを主体とする。穿孔は図面上側の大きいものと、図面下側の身部中央に小さい盲孔が認められる。線刻は3条を1単位としており、脇にはそれを括るような直線・曲線も施されている。時期は縄文時代中期後半の神明式～取組式期と考えられる。石材は、当地にある砂質凝灰岩もしくは凝灰質砂岩で、後の縄文時代後期中葉以降に当地で出現・盛行する岩偶岩版類と使用石材は同じである。

(川添和暁)



下延坂遺跡 全景(北東より)



下延坂遺跡 22Ba区(1面目) 竪穴建物跡4216SI



下延坂遺跡 22C区(1面目) 炉跡6096SL(東より)



22B区北側(2面目) 竪穴状遺構 5100SX遺物出土状況(東より)



22B区北側(2面目) 谷状遺構 5301SX(北より)



22B区北側(2面目) 岩偶 出土状況(西より)

おおはた

大畑遺跡 (本発掘調査B)

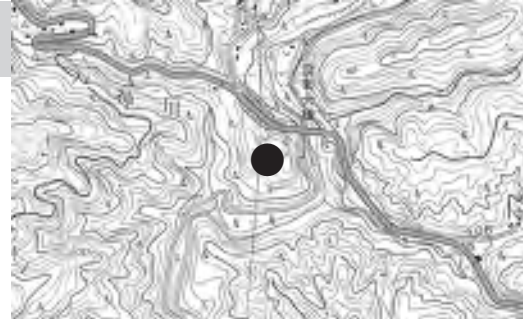
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年10月～12月

調査面積 2,080㎡

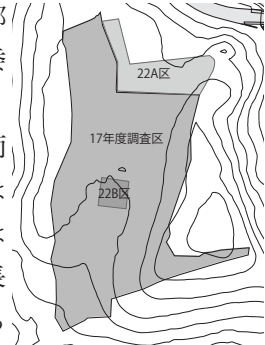
担当者 永井宏幸・社本有弥



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムに伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

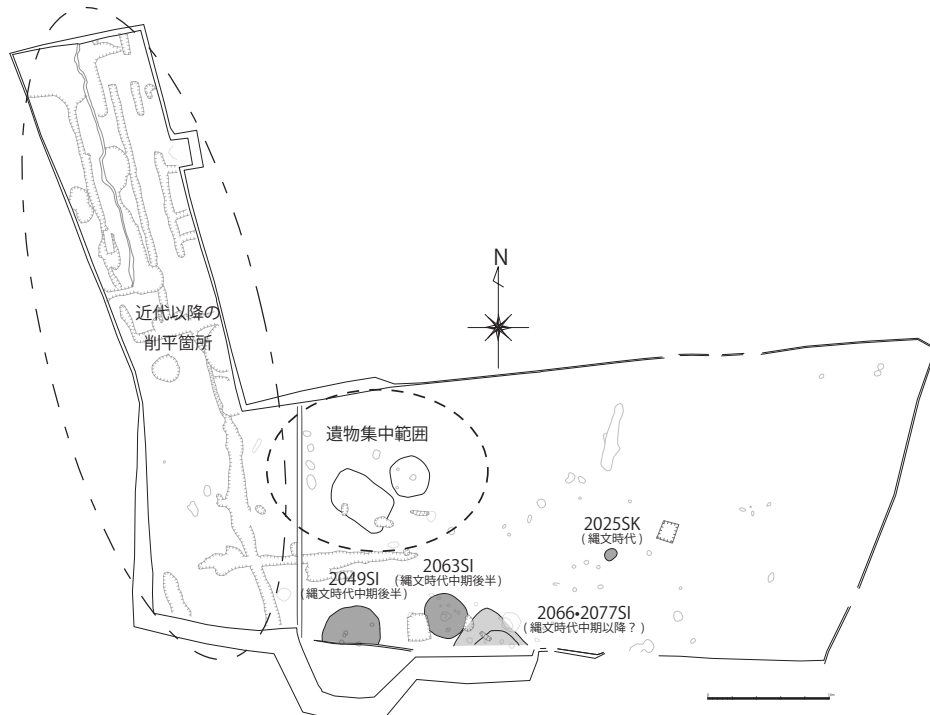
立地と環境 大畑遺跡は、境川と戸神川の合流点北東側に位置している。両河川は遺跡を挟んで標高 約370mの谷底を流れているが、遺跡はそこから崖や急斜面で隔てられた山地の頂部に所在し、標高は430～446mである。その頂部には、東西2か所に南北方向に細長い平坦面を有する尾根があり、それらにはさまれて南側へ抜ける谷地形が存在する。



大畑遺跡全体図

調査の概要 今年度調査は前回調査した調査区から北東に延長した箇所を22A区、前回調査ができなかった鉄塔の跡地を22B区として調査を開始した。

基本層序は、表土、黒色土層、褐色土層、褐色～黄褐色土層の漸移層、黄褐色土層が確認されている。また22A区西部では褐色～黄褐色土層の漸移層より上が現代の開墾等のため削平・盛土されていた。



22A 区全体図 (1/625)

2 2 A 区 22A区は東西から調査区中央北に向かって落ちる谷地形となっている。調査区東の傾斜が急な箇所には遺構・遺物は展開せず、調査区中央の緩斜面地に展開していることがわかった。遺構としては竪穴建物跡4棟、陥し穴1基を確認している。

竪穴建物跡はどちらも円形で2049SIは柱穴と思われる箇所はあるが、炉に比定されるものは確認できていない。2063SIでは柱穴2基と炉跡が確認された。時期は縄文時代中期後半と考えられ、前回調査の集落の一部と見て良いだろう。2066・2075SIは角丸方形竪穴建物跡の一部と考えられる。炉跡は確認できなかったが、柱穴と思われる遺構が伴っている。特に2075SIには壁際に排水のための溝が掘られていたようである。縄文時代の遺構と考えられるが、時期を表す遺物が伴っていない。陥し穴は調査区中央東の斜面地で検出した。長径約1m、深さ70cmほどで、中央に杭を刺していた穴が見つかった。平成29年度調査で見つかった陥し穴と一連と考えて良いだろう。

また調査区中央に剥片を中心として、石器が集中して出土する箇所が確認されている。剥片が多くを占めているが石核や折損した石鏃、未製品などが出土しており、石器の捨て場のような場所であったと考えられる。

2 2 B 区 22B区は調査区西で検出した谷底に向かって東から緩やかに下がっている。谷底に近いから遺構・遺物の数が少ない。遺構は貯蔵穴1基と土坑1基であった。

貯蔵穴は谷底で検出され、長径約1.7m、深さ約1mと比較的大きい。埋土の堆積状況から何度か掘り返されていることから貯蔵穴と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明。どんぐり等の種子の類も確認されていない。土坑は長径1.5m、深さ10cmと浅い土坑であるが、埋土から縄文時代早期末から前期初頭ごろの土器片が纏まって出土している。

(社本有弥)



22A区竪穴建物跡周辺



22B区貯蔵穴完掘状況

おおさき

大崎遺跡 (本発掘調査B)

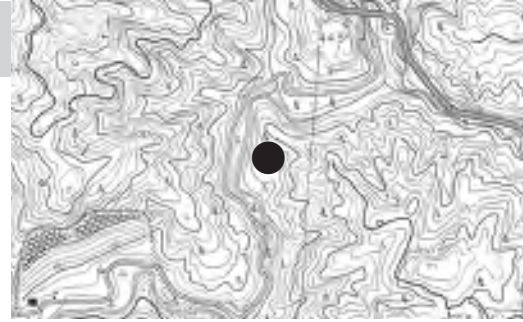
所在地 北設楽郡設楽町田口字大崎
(北緯35度06分22秒 東経137度33分50秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年5月～10月

調査面積 2,985㎡

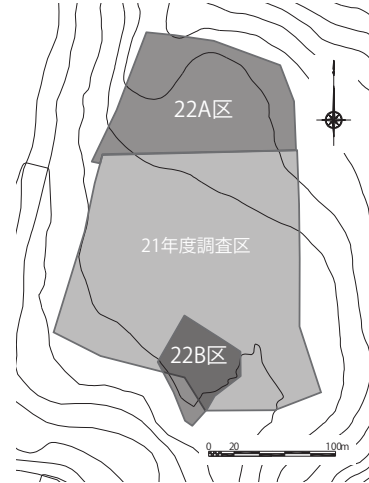
担当者 永井宏幸・川添和暁・社本有弥



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。

立地と環境 遺跡は境川東岸、河岸段丘状の緩斜面地上に立地する。当地は現在の田口集落西にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。北東側はこれら尾根に挟まれた谷地形で、湧水などのためか、調査前までは湿潤な環境となっていた。遺跡範囲内は北東から南西方向への傾斜地で、遺跡中央付近で傾斜の変換点があり、傾斜角度がさらに緩やかとなり南側へと続く。



大崎遺跡全体図

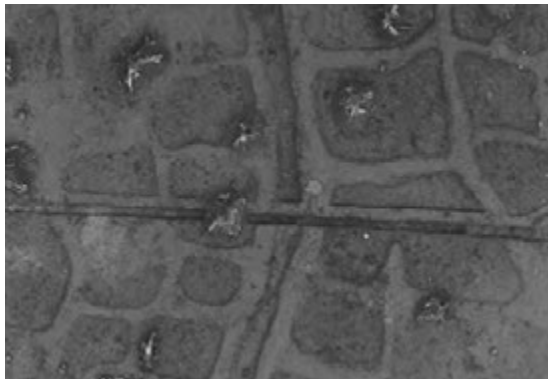
調査の概要 調査は前年度調査区の北側に22A区、前年度調査区の南に重複する形で22B区を設定、調査を行なった。層序は1層:表土、2層:灰黄褐色粘土層など、3層:ぶい黄褐色粘土・シルト層、4層:黒色粘土・シルト層、5層:明黄褐色粘土・シルト・砂・砂礫層となっている。今年度調査を行なった遺構・遺物は以下の通りとなっている。

時代・時期	検出・出土層	遺構(基数)	遺物
近世以降	表土	集石遺構(3)	陶器片
戦国期～近世	Ⅱ層中およびⅢ層上面	一部の水田関連遺構	陶器片
中世前半		水田関連遺構 [畦畔および水路]	山茶碗類【碗、小皿】、伊勢型鍋
古代		水田関連遺構か	灰釉陶器【碗、皿】
縄文時代中期～縄文時代後期	Ⅱ層下およびⅢ層上面	竪穴建物跡(11) 土坑(7)・包含層	縄文土器【深鉢等】、石器【石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー類、叩石、磨石等】
縄文時代早期以前	V層直上	土坑1基	剥片

2 2 A 区 22A区では積石・集石遺構、水田関連遺構、縄文時代早期の調査を行なった。

積石・集石遺構は4基を調査した。積石遺構は方形で約10m四方、高さ約50cm、集石遺構は楕円形で長径約1mであった。前年度調査では集石遺構を数基確認しており、何らかの信仰に関わる遺構もしくは水田造成時に礫を集積した場所と考えられる。

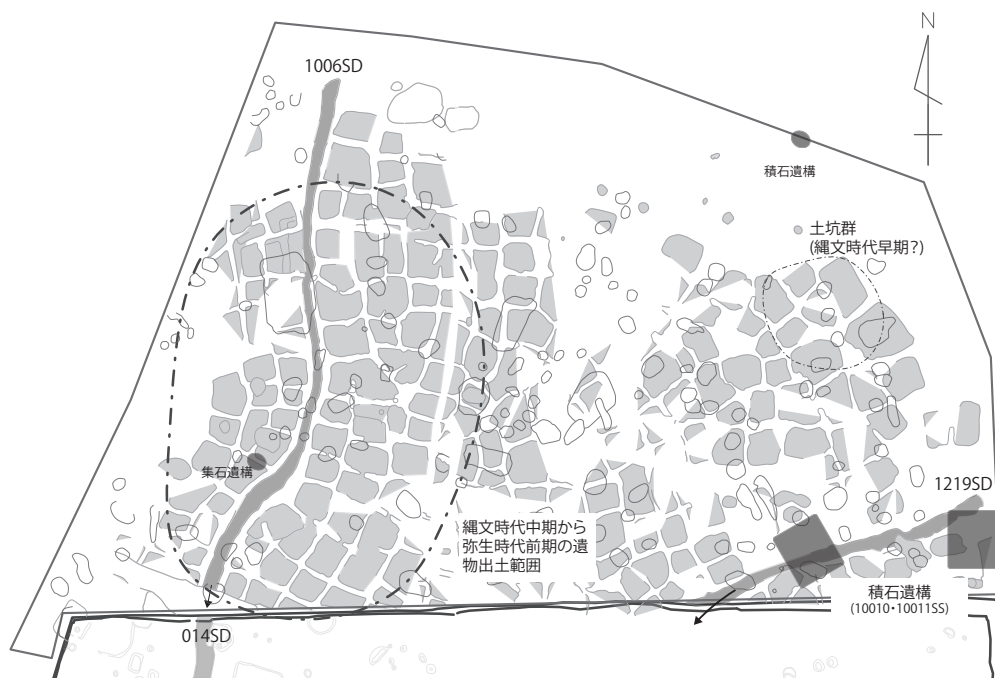
水田関連遺構は22A区の全域に展開している。畦畔、水路、畦畔内の耕作土で構成され、畦畔に囲われた区画は一辺約3～4mを主体とする小区画を呈する。今回の調査では、水路を二本確認した(1006SD・1219SD)。1006SDは調査区西部の北壁面付近から蛇行しながら西側に逸れ、前年度調査区の014SDにつながる。1219SDは調査区東壁付近から西へと伸び、おそらくこのまま昨年度の調査区へと繋がっていたと考えられる。そのため、本来の水田関連遺構は前年度調査区を含め、ほぼ全域に展開していたことが想定される。畦畔を観察すると、一部で畦畔内に焼土塊が入っている箇所があり、畦畔を造る際に何らかの儀礼的な行為が行われたと考えられる。耕作土の中には、縄文時代・弥生時代・古代・中世までの幅広い時代の遺物が出土した。特に中世に当たる遺物としては山茶碗と伊勢型鍋を中心として古瀬戸や常滑の陶器片が出土しており、これらが水田関連遺構が使われていた時代の遺物と考えられる。



水田関連遺構



1006SD 土層断面



大崎遺跡 22A 区全体図 (1/250)

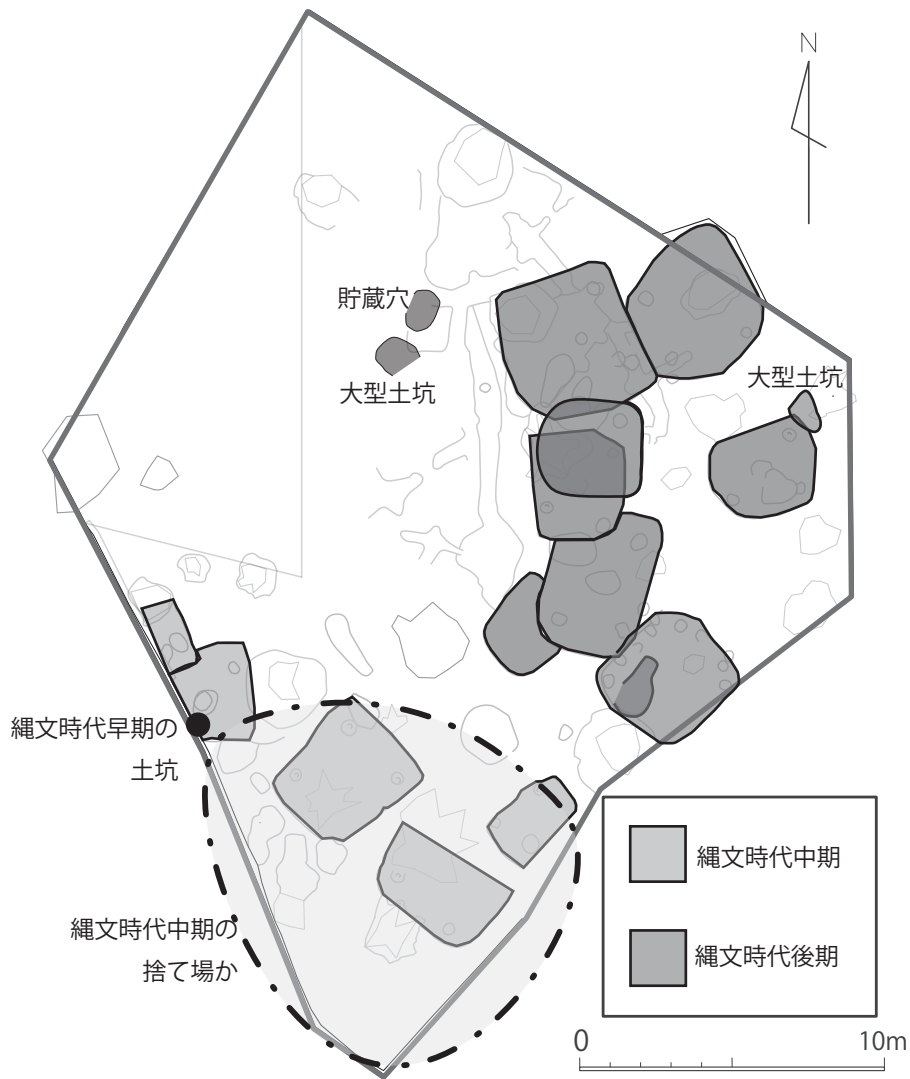
また、水田関連遺構の下面を調査したところ、斜面地では早期ごろの土坑が見つかり、表裏条痕土器や撚糸文土器の破片と安山岩製の剥片が散らばって出土している。

2 2 B 区 22B区では縄文時代中期から後期の遺構を調査した。

縄文時代中期の遺構は調査区の南西に展開していた。確認された遺構は竪穴建物跡3棟で、うち2棟は重複している(6015SI・6113SI)。重複している竪穴建物跡に注目すると、上の竪穴建物跡は正方形に近い隅丸方形で、石囲炉と思われる炉跡と柱穴が検出された。下の竪穴建物跡は隅丸でやや長方形を呈し、複数の柱穴と壁溝と思われる溝跡が検出された。

また、南端付近の傾斜地では遺物が広がって出土した。出土した遺物は縄文時代中期中葉から中期後半にかけてであり、土器を中心として、安山岩製の剥片や叩石・磨石などの礫石器が出土している。川へ落ちていく地形ということから、おそらく使えなくなった土器や石器の捨て場であったと考えられる。

縄文時代後期の遺構は、22B区の北東部に展開していた。確認された遺構は竪穴建物跡



大崎遺跡 22B 区全体図 (1/100)

7棟、大型土坑4基であった。特に調査区中央付近の竪穴建物跡は4棟の竪穴建物跡が重複していた。竪穴建物跡は約3～4m四方の隅丸方形を主体とするが、円形の竪穴建物跡も見つかっている。特に6052SIは土器敷戸が作られた痕跡が見つかっている。出土遺物としては、土器片や石器が出土、特に縄文時代後期中葉ごろの土器片が遺構内から纏まって出土している。

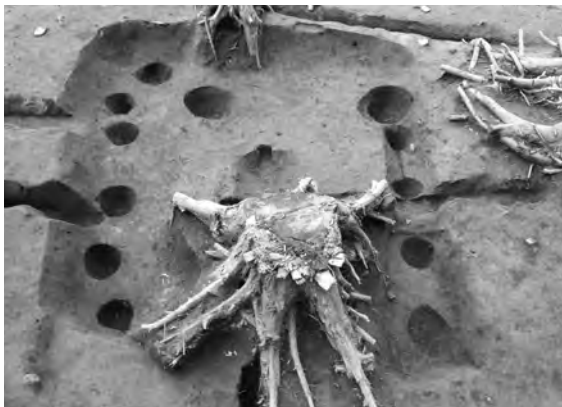
縄文時代早期 22B区では土器が纏まって出土している。かなり崩れてはいるが、横位で埋まっていたと考えられる。遺物は22B区の南で見つかっており、早期後半と思われる土器片が点々と出土している。今回の調査では竪穴建物跡が確認できなかったが、縄文時代早期後半以降に何らかの活動があったと考えられる。
(社本有弥)



22B 区縄文時代後期の竪穴建物跡群



22B 区縄文時代後期の土器 (八王子式か)



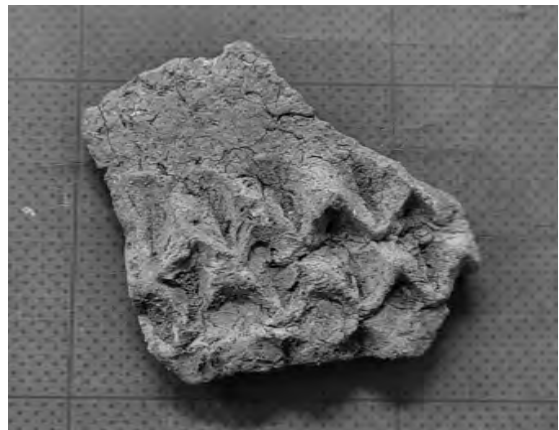
22B 区縄文時代中期後半の竪穴建物跡



22B 区縄文時代中期後半の土器



大崎遺跡 22B 区縄文時代早期土器出土状況



縄文時代前期の土器片 (入海式か)

かみをろう しもをろう
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 (本発掘調査B)

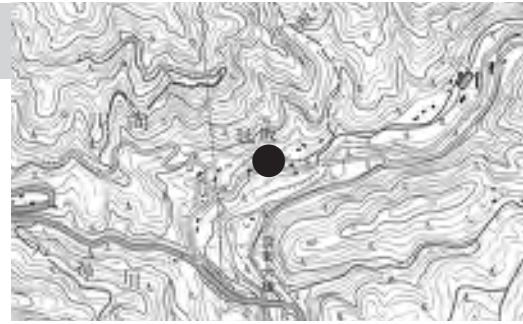
所在地 北設楽郡設楽町川向字上ヲロウ・下ヲロウ・中空
(北緯35度06分51秒 東経137度34分5秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年6月～7月

調査面積 340㎡

担当者 永井宏幸・川添和暁



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和4年6月から7月にかけて実施した。今年度調査区22区は、県道432号小松田口線の北側、調査区20C区に接して遺跡範囲の北西端に340㎡で設定された。



調査区位置図

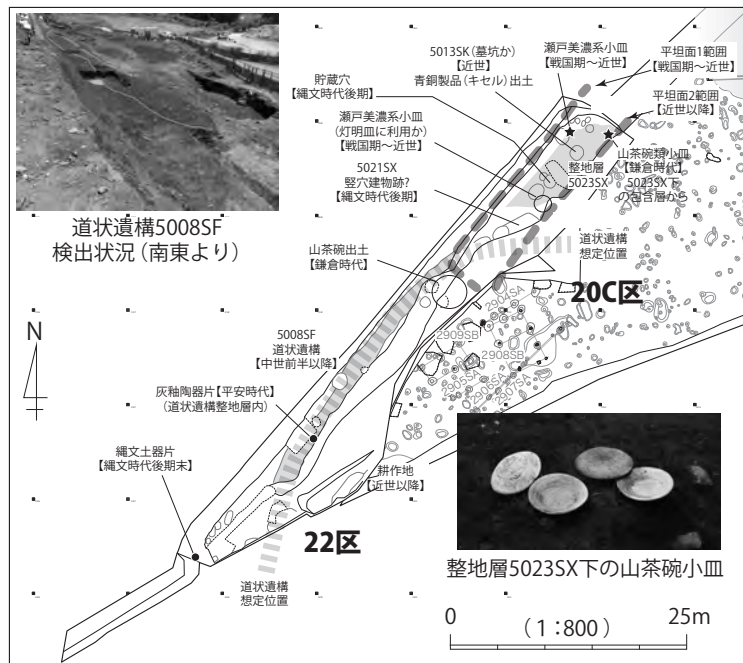
立地と環境 遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる扇状地堆積（土石流堆積）の累積によって形成されている。今年度調査区の調査前の標高は、404～408mを測る。

調査の概要 調査成果は、以下の通りである。

時代・時期	遺構	遺物
縄文時代後期	竪穴建物跡?・貯蔵穴	縄文土器・石器(剥片)
古代～中世前半	道状遺構	灰釉陶器片・山茶碗類(碗・小皿)・土師鍋片
中世後半(戦国期)～近世前半	平坦面・整地層	瀬戸美濃系小皿など
近世	土坑(墓坑か)	青銅製品(キセル片)

集落への入り口となる道状遺構 特に注目される成果は、道状遺構が見つかったことである。道状遺構は、もともと浅い凹みの溝形状のところに、整地層が充填されていた。層には片麻岩礫のほか、炭化物粒や焼土が散在しており、灰釉陶器片や山茶碗・土師鍋片も出土した。この道状遺構は、北東側に昇るところで、戦国期から江戸時代の平坦面造成によって、途切れていた。当地は明治時代初期の地籍図や近世後半の村絵図にも、集落に入る道の存在が記載されており、今回の発掘調査でその存在が証明されたことになった。

(川添和暁)



2022年度調査区全体図

うちがいつばし
内貝津橋遺跡 (本発掘調査B)

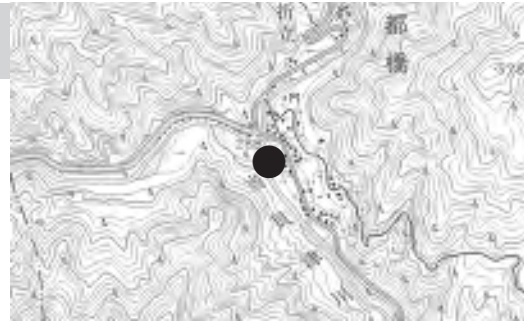
所在地 設楽町三都橋字内貝津地内
(北緯35度3分25秒 東経137度30分56秒)

調査理由 道路改築工事

調査期間 令和4年7月～10月

調査面積 920㎡

担当者 永井宏幸・鈴木恵介



調査地点 (1/2.5万「海老」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課(新城設楽建設事務所)による道路改築工事に伴う事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県民文化局を通じた委託事業として、令和4年7月から10月にかけて本発掘調査Bを実施した。

立地と環境 調査対象地の現況は旧耕作地である。表土掘削で近代の耕作土、床土を除去し、黄褐色中粒砂の基盤層上面で遺構検出を行なった。西側のA区では基盤層に径1mを超える巨岩が多数含まれており、上層の耕作土から遺物は出土するものの遺構の検出は困難であった。東側のB区では黄褐色の基盤層が安定する状況となり遺構の検出が可能となった。

調査の概要 調査面積は920㎡である。遺構検出面までの掘削深度は浅いところで0.5m、深いところでは1.3mであった。検出された遺構には、耕作溝、土坑、掘立柱建物跡092SB、柱列093SAがある。掘立柱建物跡092SBは1間×1間の掘立柱建物跡で、長軸(南北)3.1m、短軸(東西)2.9m。土坑025SKが中央に位置する。土坑025SKの上面には、被熱した炉跡091SLが検出された。他には027SK、039SKが092SB範囲内に入り、これらの土坑・炉跡は鍛冶関連遺構で、092SBはこれらを覆う目的で構築された可能性が考えられる。柱列093SAは中世以降の柱列で、調査区南半部で検出されたが、いずれも柱穴の川側(西側)に抜き取り痕跡が付属し、川側に倒れる状況下で撤去されたと見られる。(鈴木恵介)



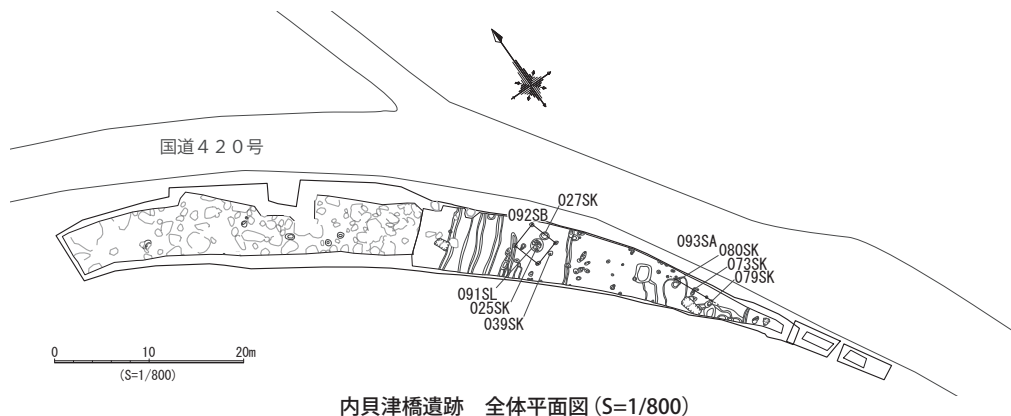
A区出土 石匙



B区 掘立柱建物跡092SB



B区 柱列093SA



内貝津橋遺跡 全体平面図 (S=1/800)

はなのきぎた
花の木北遺跡 (本発掘調査B)

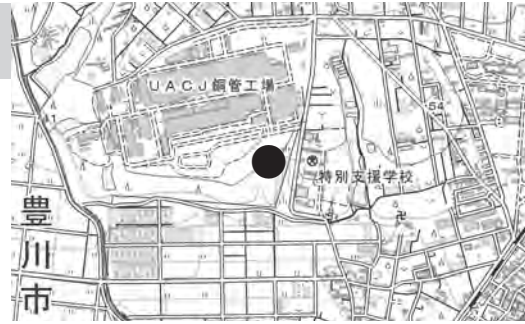
所在地 豊川市大木町新道
(北緯34度51分34秒 東経137度24分48秒)

調査理由 一般国道151号 (一宮バイパス)

調査期間 令和4年10月～令和5年3月

調査面積 1355㎡

担当者 樋上昇・池本正明



調査地点 (1/2.5万「新城」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課 (東三河建設事務所) による一般国道 151 号 (一宮バイパス) に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。遺跡は令和元年度に実施した本発掘調査 A において新たに確認されたもので、令和 3 年度には愛知県埋蔵文化財センターが 2110 ㎡の本発掘調査 B を実施している。

立地と環境 遺跡は豊川市の北部で、平成 18 年に豊川市に合併した 宝飯郡一宮町のエリアに該当する。地形的には西原大地と呼ばれる本宮山山麓から広がる扇状地の末端部分に所在する。周辺の遺跡を概観すると、小規模な谷を挟んだ南側には花の木古墳群・花の木遺跡が立地している。これらの遺跡は令和 2 年度に愛知県埋蔵文化財センターが本発掘調査 B を実施し、花の木遺跡は弥生時代中期～後期の集落遺跡、花の木古墳群は古墳時代中期前半を中心とする古墳群であることが確認されている。また、遺跡の東側には近接して宝陵高校遺跡、南東 0.7 km 程度先には鎗水 A 遺跡などの弥生時代の遺跡が周知となっている。

調査の概要 本年度の調査区は令和 3 年度の調査区に接した北側に位置する。面積は 1,130 ㎡、遺構検出面は北～南に向かう緩やかな斜面となっており、標高は 50 ～ 49 m 程度となる。調査により検出できた遺構は、昨年度調査区から続く弥生時代中期と古墳時代中期の居住域となる。確認できた主な遺構は、竪穴建物・土坑・溝などがある。

次に遺構数に着眼すると、古墳時代中期の遺構が多く確認できた状況で、竪穴建物は昨年度南半分を調査した 1 棟と新たに検出した 4 棟が当該期に属する他、多数の土坑が検出されている。また、調査区の北東部分では幅約 7m 程度の溝が確認されている。東側は調査区外へと伸び、西側は攪乱により消失するが、端部は調査区内に存在していたものと考えられる。これに対し弥生時代中期の遺構は希薄で、昨年度南半分を調査した竪穴建物の他に、若干の土坑が確認できたのみとなる。

まとめ 本年度の調査区は昨年度調査区とほぼ同様の成果を得る事ができた。遺構の継続時期や内容から、小規模な谷を挟んだ南側に所在する花の木古墳群・花の木遺跡と有機的な関連性をもつものと考えられる。

弥生時代中期の遺構は希薄となる。分布状況からは今回の調査区が弥生時代中期の集落遺跡の北限となっている事が予測できる。一方、古墳時代中期の遺構は、遺構数も昨年度調査区より密度が濃い。こうした状況から、古墳時代中期の集落域は、平坦面がさらに続く北側へと広がるものと予測できる。
(池本正明)



調査区 全景



遺構配置図 (1:500)

のぞえ
野添遺跡 (本発掘調査B)

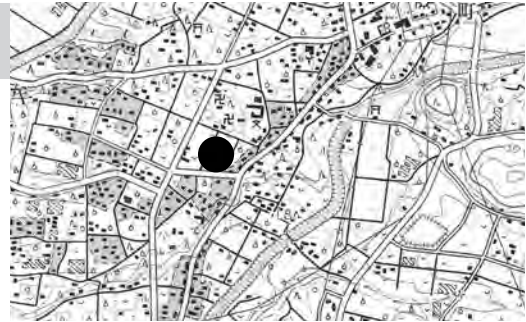
所在地 豊橋市石巻本町地内
(北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒)

調査理由 道路改良工事 (交付金) 東三河環状線

調査期間 令和4年7月～令和5年1月

調査面積 4,055㎡

担当者 樋上 昇・池本正明・田中 良



調査地点 (1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課東三河東建設事務所による道路改良工事 (交付金) 東三河環状線に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成25年度に2,000㎡の調査がおこなわれた。今年度は、前回調査地点よりも高位の段丘上を4調査区に分け、22A区・22Ba区・22Bb区・22C区として調査を実施した。調査面積は4,055㎡である。

立地と環境 遺跡は豊川左岸の河岸段丘の縁辺部に立地し、東側には神田川沿いの低地がある。調査地点は、河岸段丘上に位置し、平成25年度調査地点は低地および段丘崖にあたる。遺跡の周辺には、神田川沿いの低地に弥生時代中期から後期、中世を主体とする東下地遺跡がある。

調査の概要 調査は、西側の22C区から東へ順に開始した。現在は、耕作地であり、遺物包含層が残っていないため、地山であるシルト層の上面で遺構検出をおこなった。その結果、区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が、計4箇所検出された。また、掘立柱建物跡は8棟確認された。出土遺物には、大量の内耳鍋片や土師皿などの土師器、天目茶碗などの陶器片、磁器片、鉄滓などがあり、時期は16世紀～17世紀前半が主体となる。中には、須恵器や山茶碗など一部古い時期の遺物もある。さらには、縄文時代まで遡る石器も出土している。

2 2 C 区 22C区では、16世紀から17世紀前半の区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が、調査区北側と南側の2箇所から検出された。調査区中央では、東西方向に伸びる区画溝が検出され、こちらは前述の区画とは時期が異なると考えられ、近世の区画溝の可能性はある。

南側の区画は、148SD・160SDの区画溝と掘立柱建物跡02・03の組み合わせからなる。また、柱穴は布掘り状の掘り方をもつ。掘立柱建物跡01は、上記の区画より新しいもので、一部の柱穴は区画溝の上から掘り込まれている。

北側の区画は、123SD・231SDの区画溝と掘立柱建物跡04の組み合わせからなる。この区画は、他にも柱穴が複数あり、別の掘立柱建物跡もあると考えられるが、調査区外にも一部柱穴が伸びるため、現状では組めていない。

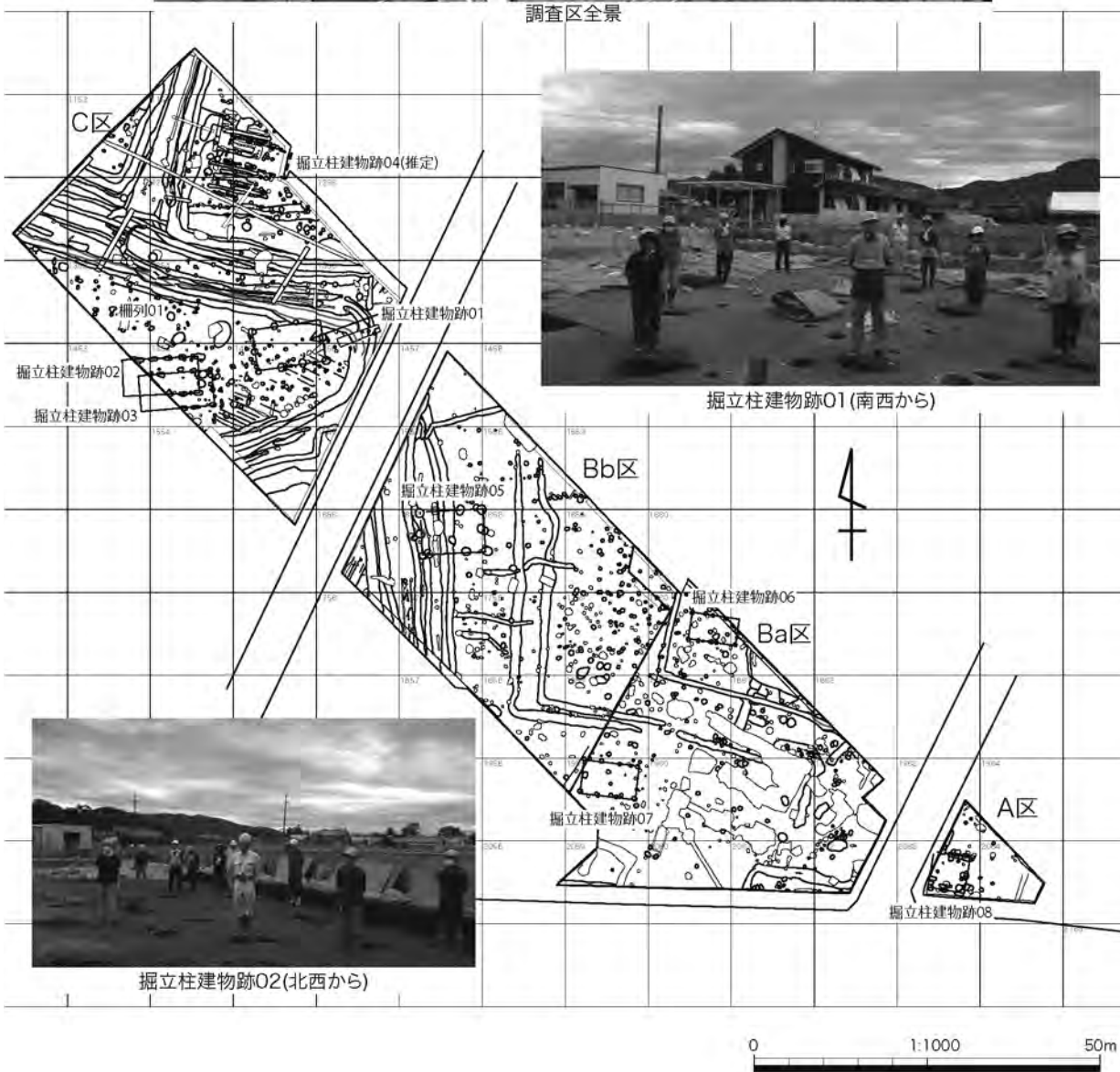
1 5 3 S D 153SDは、区画溝148SDより新しい溝で、調査区よりも南西にまっすぐ伸びると考えられる。この溝からは、志野焼の碗が出土していることから、17世紀前半以降と考えられる。

1 4 8 S D 148SDは、南側を区画する区画溝で、幾度となく掘り返されている。東側が新しく掘り返されており、遺物の出土が少なく、西側では内耳鍋片を主体とする遺物が多く出土している。時期は、16世紀から17世紀前半と考えられる。

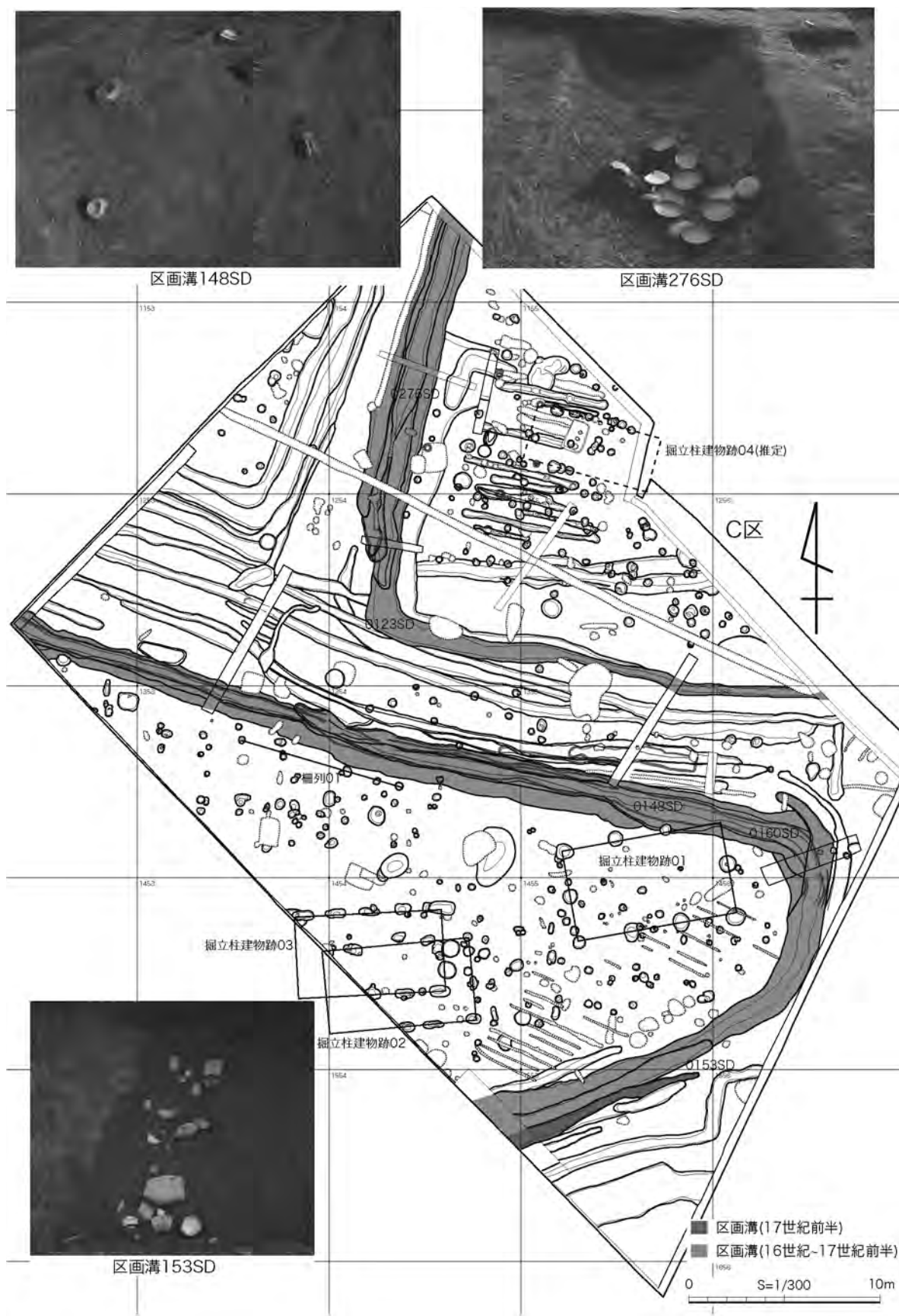
2 7 6 S D 276SDは、区画溝123SDより新しい溝で、さらに北側へ伸びると考えられる。この溝からは、大形の土師器皿12枚と小皿1枚が狭い範囲からまとまって出土している。時期は16世紀前半であり、南側の区画溝よりはやや古い可能性がある。



調査区全景



野添遺跡遺構全体図 (S=1/1000)



野添遺跡 C 区の遺構全体図 (S=1/300)

2 2 B b 区 Bb区は、調査区北側にBb区まで伸びる区画溝が併行して2条検出され、調査区西側では掘立柱建物跡05が検出された。調査区西側では、C区方向へ伸びる区画溝も確認されるが、現道下で屈曲すると考えられる溝もある。掘立柱建物跡05は、区画溝を壊して柱穴が構築されているものもあるため、17世紀前半よりも新しいと考えられる。

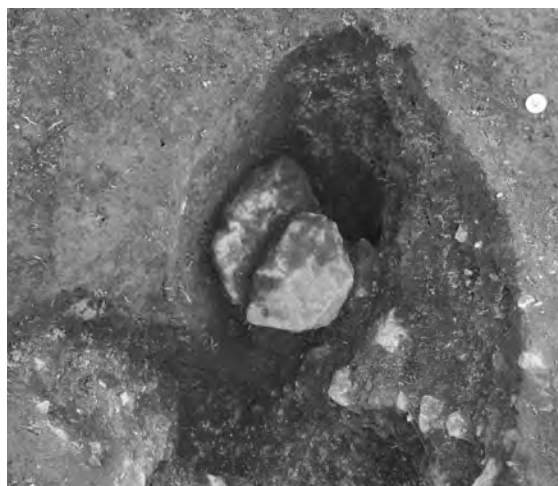
2 2 B a 区 Ba区は、調査区北側で区画溝と掘立柱建物跡06からなる区画が検出された。この区画の区画溝は、断面形状がV字状となり、柵列を伴うと考えられる柱穴が複数検出されている。調査区南西側では、掘立柱建物跡07が検出され、周辺に区画溝がないことから、掘立柱建物跡05と同様、区画よりも新しい時期の遺構と考えられる。

また、調査区南側では、山茶碗が2枚重なって出土した土坑801SKが検出された。中世まで遡る遺構は、今回の調査ではこの事例のみである。

2 2 A 区 A区では、調査区南西側で根石を伴う掘立柱建物跡08が検出された。時期は、掘立柱建物跡05や掘立柱建物跡07と同じように、区画溝を伴わないことと、根石をもつ柱穴で構成されることから、17世紀前半以降と考えられる。また、調査区東側に遺構が全くないことと、東側は低地に向かって急激に傾斜していることから、この調査区はちょうど集落の縁辺部にあたる可能性が高い。

ま と め 今回の調査では、16世紀から17世紀前半の集落が検出された。特に22C区では、北と南に2区画検出され、区画溝や柱穴からは16世紀から17世紀前半にかけての陶器や磁器、内耳鍋などの土師器が出土している。これらの出土遺物から、地方領主の屋敷地であったと推察される。『八名郡史』には、「徳川家康の時代に、吉田城領主から寺領を寄進される」との記載があり、遺跡の北側には臨済宗長谷寺があることから、この寺院に関連する遺構である可能性が考えられる。また、Ba区では801SKが検出され、区画溝の埋土などからも山茶碗片が出土しているため、中世まで集落の痕跡が遡れることが判明した。

平成25年度調査区とは、異なる時代の遺構が検出されたが、出土遺物には古代以前の遺物も含まれるため、今回の調査区にも古代以前の遺構があったと考えられるが、16世紀以降の造成により、遺構としては残っていなかったと考えられる。 (田中 良)



掘立柱建物跡 08 根石を伴う柱穴



山茶碗を伴う土坑 801SK

よしだじょうし あくみ
吉田城址・飽海遺跡 (本発掘調査B)

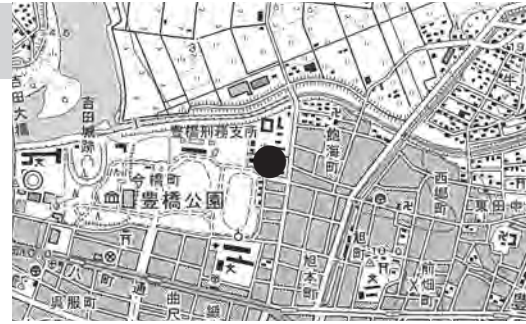
所在地 豊橋市今橋町6番地地内
(北緯34度46分12秒 東経137度23分59秒)

調査理由 愛知県東三河建設事務所改修工事(発電機棟等建設)

調査期間 令和4年12月

調査面積 100㎡

担当者 樋上 昇・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 本遺跡の調査は、愛知県東三河建設事務所改修工事（発電機棟等建設）にともなう事前調査として、愛知県建築局公共建築部公共建築課より愛知県県民文化局を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、令和4年12月に調査を実施した。調査区は愛知県東三河建設事務所の北側にある。調査面積は100㎡で、北側を22A区、南側を22B区、中央の東側を22C区に分けて調査した。

立地と環境 吉田城址・飽海遺跡は豊橋市中央部にある豊川の左岸河岸段丘上にある遺跡で、今回の発掘調査地点は吉田城址の北東側にある外堀が通る地点にあたる。また調査地点は縄文時代から中世にかけての飽海遺跡とも重複している。

調査の概要 今回の調査では、鎌倉時代と江戸時代の主に2時期の遺構と出土遺物が確認できた。

鎌倉時代では、柱穴と思われる土坑18基を確認することができた。土坑は径10cm～35cmの平面円形状のもので、007SKより焼き締め陶器の甕が出土した。

江戸時代では、溝3条を確認することができた。001SDは22A区から22C区の西側にて確認された吉田城址の外堀の東肩部分にあたる。002SDと019SDは22B区から22C区の南側から22Bに確認された溝である。これらの遺構からは、江戸時代後期から近代にかけての陶磁器などが出土した。

(蔭山誠一)



22区全景 (東上空より)



22B区SK007 (北東より)